

通日雇について

藤村潤一郎

一 宮島の銅灯籠

安芸の厳島神社には、海上から大鳥居を通して社殿正面の平舞台の前と左右に三基の銅灯籠が石台に乗って海に浮んでいる。左右の銅灯籠は六角型の同形であり、右側の銅灯籠を社殿側から示すと第一図になる。

銅灯籠の竿の部分は上、中、下の三部に分れている。写真の裏側、即ち海からみて正面には、上、下部に「常燈」と大きく浮彫してあり、中部の節の海からみて裏面には「奉寄進」と右から左にかけて横に浮彫している。

竿の上部には、前記「常」の字の左側から右にかけて次の様に彫られている。なお字の配列上下の位置等は拓本をとらず筆写したから必ずしも正確でない事を断っておく。

敕許

御鋳物師

芸劔賀茂郡白市住

伊原惣十郎藤原政義

通日雇について（藤村）



第1図 厳島神社銅灯籠

世話方伊原表兵衛政幸

寺家村

兼友利助

堺町正助 竹屋町清吉

広 荒神町岩藏 同 万六

同 広吉 荒神町吉藏

同 万藏 塚本町竹藏

嶋 竹屋町芳兵衛 四日市友助

同 万藏

とあり、鋳物師、世話方と広島とは「常」の字の左右に彫られているといつてもよい位の場所にある。

下部には「燈」の字の左から

江戸

出雲屋重治郎

政田屋嘉兵衛

福嶋屋所左衛門

同 忠藏

尾張屋源七

同 藤吉

丹後屋安左衛門

同 甚兵衛

田村屋半兵衛

但馬屋弥三郎

米屋政吉

加賀屋甚太郎

米屋佐治兵衛

津国屋九左衛門

同忠兵衛

万屋清吉

遠効屋忠兵衛

丹後屋与三郎

見伏

道中人足請負仲間

江戸

同

伏見

広嶋

世話人
井筒屋
伊藤屋

大坂

政田屋権治郎

万屋権治郎

通日雇について（藤村）

政田屋鶴 松 大坂屋忠 吉

江戸惣 吉 同 松治郎

と彫られている。即ち広島一人、江戸一五人、伏見三人、大坂六人であり、世話人は広島二人である。

次に反花の部分の裏側に

塚本町

伊 八

竹屋町

十右衛門

と彫られている。従ってこれは広島の世話人のもとに、江戸、伏見、大坂の道中人足方請負仲間やその一部の者が広島の人々と共にこの銅灯籠を寄進した事を示している。彼等はその業務の上で関係があったから協同した訳で、それは西国大名の中国路、瀬戸内海を通行する際に通人馬を請負ったからではあるまいか。ここには京都の通日雇の名はみえないが、この銅灯籠は矢張り各地の通日雇が連絡した可能性を示していると考えたい。

なお左側の銅灯籠は竿の正面に「常燈」、その中部の節の裏側に「奉寄進」、上部に「天明五年 乙巳 正月吉日」、下部に「広島 連中 治工大坂住仏具屋 山本屋源右衛門 同細工人取次 大坂道修町堺 筋木屋彦左衛門」と彫られている。前記右側の銅灯籠は人名等から見て、天明五年以後に左側ものを模して製作、寄進されたものではあるまいか。なお正面の銅灯籠は形が異っており、寛文一〇年に安芸国佐伯郡穴村花屋小田権右衛門が寄進し、後年破損したのを寛政九年九月に同国山県郡溝口村花屋小田正作政久が修復している。兩人共に鉄山師である。(補)

二 江戸

これらの通日雇の内で江戸については既に若干の考察を行なったので、ここでは補足するにとどめる。

「江戸六組飛脚屋仲間」として仲間の名簿があるが、これはその文書の表面右側に江戸六組飛脚屋仲間と書かれているためである。大阪府立図書館蔵の万延元年閏三月の江戸六組飛脚屋仲間の書袋書名は

庚申改正 六組飛脚屋名鑑

となっている。他の年度については今後の考証にまきたい。

幸田成友旧蔵安政六己未年六月七日校訂「道中筋諸留類」⁽²⁾によると、文政三辰年に六組通し日雇請負が道中奉行に届けた「江戸々東海道伊勢路通り大坂迄、十二日泊り十五日限り尤欠放し」では道中陸尺と奴の一人につき定賃銀は、上々陸尺銀四〇五匁、上陸尺二五〇匁、中陸尺一三五匁、上々奴三三〇匁、上奴二一〇匁、中奴一一五匁である。次に通日雇の請負証文で榎畑雪湖「江戸時代の交通文化」五六―七頁に紹介された通信博物館所蔵文書の原文書を閲覧出来たので記す。

東海道通人足請負証文之事

従江戸御屋鋪伊勢路通り伏見迄

御道中日数十二日限

一刀脇差指 忝人ニ付 賃銀六拾四匁八分ツ、
六十九匁四分

一平人足 忝人ニ付 同 六拾四匁八分ツ、
六十九匁四分

但シ御荷物六貫目持

一御長持貫目拾貫目ニ付 同 九拾五匁四分宛

但シ壺棹貳拾貫匁の内も

壺人六貫匁持賃銀割合ニメ可被下候事

一御棺舁 壺人ニ付 賃銀貳百五拾匁ツ、

一六人掛り駕籠舁 壺人ニ付 賃銀九拾四匁三分ツ、

一四人掛り同 壺人ニ付 賃銀八拾五匁^{九十五匁}壺分ツ、

一通馬 壺疋ニ付 賃銀貳百五拾七匁ツ、

一佐谷廻り 壺人ニ付 同貳匁五分ツ、

一山崎廻り 壺人ニ付 同拾五匁五分ツ、

一美濃廻り 壺人ニ付 七^一三分七^リ

但シ其外御道中廻り故不時御用等有之候節は 乍恐 大守様御旅行御供立御定之通り御証文前御立被遊
可被下候事

一中国路通人馬直段之儀右東海道直段日割ヲ以可被下候事

右今度兩海道御用通人足某

請負仕候上は随分念ヲ入能人足差出シ御用無滞相勤可申候、若人足之内取逃欠落等仕候ハ、其色物相改御差図
次第代銀ニ而払上可申候、若又人足之内不達者仕候歟、又者相煩御念入不申者御座候ハ、其所能人足早速立
替、御手支無之候ニ仕、諸事御差図之通り相勤可申候、右ヶ条ニ相洩候義在之候共、一向賃銀之儀申上間敷候、

其内差立相替義茂御座候節は、時々御吟味を以何分ニ茂可被仰付候、為後日之証文、仍而如件

宝曆十一年

豊嶋屋

巳十一月

清蔵

御役人衆中様

さて最後に六組飛脚屋の兼業の問題がある。田中康雄編「江戸商人名前一覧―江戸時代後期を中心とした―」三井文庫論叢六号により嘉永四年「諸問屋名前帳」をみると、名前により多くの兼業関係が知られるが、その多くの場合には店舗は別の場所にある。全面的な調査を終えていないが、例えば六組飛脚屋芝口組加賀屋次郎兵衛（兼房町家持⁽³⁾）の場合には、人宿四番組（治郎兵衛、兼房町家持⁽⁴⁾）、地廻米穀問屋拾八番組（治郎兵衛、兼房町家持⁽⁵⁾）、脇店八ヶ所組米屋芝三組（治郎兵衛、兼房町家持⁽⁶⁾）、春米屋八番組（次郎兵衛、兼房町家持⁽⁷⁾）であり店舗は兼房町家持である点は一致するが、これが別棟かどうかは不明である。

六組飛脚屋芝口組に嘉永五年四月加入、慶応二年五月休業の伊勢屋仙右衛門（弥左衛門町伝右衛門地借⁽⁸⁾）は、人宿六番組（弥左衛門町伝右衛門店⁽⁹⁾）、炭薪仲買五番組（麻布新網町二丁目家持⁽¹⁰⁾）の兼業となるが、これが兼業か同名異人かは不明である。

いずれにせよこの問題は業種間の兼業の問題を含めて後考にまきたい。

三 大坂

「五街道取締書物類寄拾六之帳」⁽¹¹⁾の寛政元年酉八月道中奉行桑原伊予守、根岸肥前守から老中松平越中守宛の「京

大坂伏見通日雇之儀ニ付申上候書付」は同二〇日に許可されている。即ち

道中筋通日雇請負之儀、先達而伺之上御当地六組百九拾四人之もの江申付、右伺書之内朱書ニ申上置候通、京・大坂・伏見三ヶ所ニ而上下人足受負渡世之もの共吟味之儀、奉行々江懸合候処、仲間相定、右取締之儀江戸表同様致し度旨、京都ニ而拾六人、大坂ニ而九拾三人、伏見ニ而拾貳人仲間取極相願候段申越候間、諸事先達而江戸表之もの共江申渡候振合を以願之通可申渡旨、三ヶ所奉行江申遣、京・大坂・伏見三ヶ所之もの共も先達而相触候江戸表之もの共同様可相心得旨、道中筋江も尚又触書差出申候、以上

西八月

として、京都、大坂、伏見に江戸と同様の上下通し日雇請負仲間組合が申付けられ、触書が五街道宿々に廻された。

この間の事情を大坂についてみると、天明七末年より寛政二戌年迄「六組飛脚屋旧記」⁽¹²⁾にある寛政元年一〇月一日付江戸上下飛脚屋六組年行事宛大坂川西・上町両組行事書状によると、同年四月二二日に御奉行所から道中請負方渡世の者の名前書出しが命ぜられた。三郷町々から書上げた名前の者全員を召出され、江戸にならって仲間株を仰付けられたので御請し、相談の結果として上町組六一人、川西組二二人、合計九三人が一紙連印して六月十一日に提出した。

この人員は「尤九拾三人之内ニは無用之仁も相見江候得共、元来町々より書上候名前之仁故、此方共より差留候ニも不及、一紙連印ニ相願候」とあり、相当零細な者も含んでいるのではあるまいか。

ついで九月三日に全員召出されて、仲間株御免になったから江戸同様に心得る事を仰付けられた。その結果「元来当方は是迄組合年行事杯と申義も無之」具合であるが、急拠年行事を撰出し、江戸に対して「其御地御振合御株札表

懸札帳面御調御差登」を求め、他方江戸から申出のあった御加勢金については「京伏見共ニ追々掛合申入候、何れ共御加勢仕候様取計可申候」としている。

従来の通日雇について「難波丸綱目」により関係分をみると、延享四丁卯春志田与助撰「改正増補難波丸綱目」では御大名人足請負方一二人、御大名奴入口四人、御用人足請負人四人、御用鳶人足請負人二人、江戸長崎御用人足請負人二人があり、この内の何れが仲間⁽¹⁴⁾に該当するかは不明のため、以後は御大名人足請負人のみについて記すると、同寛延改正は一二人、宝暦改正は一二人、宝暦己卯再改⁽¹⁵⁾(九年)は一二人、安永六年丁酉初夏序陰山三郎兵衛「難波丸綱目」は九人、同享和元年辛酉十一月改正⁽¹⁶⁾は九人であり、元禄十丁丑歳仲夏上梓、天保六乙未歳仲秋改正補刻「国花万葉記」所収の同天保十年己亥十月改正「難波丸綱目」に一二人となっている。

なお「難波丸綱目」の書誌については日野龍夫氏の研究があるので参照されたい。

次に文化初年調査の大坂諸株には「江戸通し日雇仲間」がみえている⁽²¹⁾。そして「五街道取締書物類寄拾六之帳」によると文政四年一二月には上町組二五人、川西組三〇人、合計五五人であり、嘉永七甲寅年「大阪両組通日雇仲間名鑑」⁽²²⁾では上町組三〇人、川西組三五人、合計六五人となっている。

さて文政七年四月二日付口達「素人ニ而上下渡世之者差置、又は通し日雇致請負候者ハ、川西上町両組仲間へ可致加入之事」⁽²⁴⁾によると、大坂の通し日雇仲間川西組、上町組の者が、素人で通し日雇の宿をする者を仲間⁽²⁴⁾に加入させ諸御触、規定を遵守する事を願出た結果、今後は素人で上下渡世の者を置くか、通日雇を請負の者は仲間⁽²⁴⁾に加入する様に達があった。この事は寛政元年の仲間仰付の時期と比較して、仲間外における通日雇の存在と彼等が相当に零細な業者である事を推測させる。

天保改革により、天保一三年四月に「株札、問屋、仲間、組合と相唱候儀差止」となったが、通し日雇請負は金銭

両替屋他二〇業と共に一応除外された。しかし同年六月一四日付「道中通日雇請負人并御用刎魚問屋差止之事」⁽²⁵⁾により

先達而株札・并問屋・仲間・組合唱方等之儀ニ付、御触達有之候節、道中日雇請負人之義ハ、追而及沙汰候迄、是迄之通可相心得候処、以後右之分も差障無之候間、右請負渡世望之ものは、勝手次第最初可申候、尤於道中日雇人足共、不法不束之義有之候得は、当人ハ勿論、請負人も嚴重可申付条、不取締之義無之様可致候

として仲間差止になった。ついで嘉永の間屋再興により安政元年二月一四日に「道中通日雇受負仲間再興之事」⁽²⁶⁾に去ル寅年株札・并問屋・仲間・組合才唱候義停止相成節、道中通日雇請負仲間も差止申渡置候、然ル処今般問屋組合等再興被仰出候ニ付、道中通日雇受負仲間之義も同様申付、諸事前々之通嚴重可相心得、尤夫々名前帳差遣し置候共、株式と申筋ニ無之候間、人数之増減勝手次第ニ相心得、雇先姓名并人数出立帰着又ハ渡世替等之義、其度毎届出、弥以通日雇之もの共不法重頭等無之様堅可申付、相背候ハ、急度可及沙汰段、右請負人共申渡候間、一同其旨可存候

右之通三郷町中可触知もの也

寅二月 信濃

因幡

とあり、人数に制限はない点は新らしいが、後半の業務届出は前から行なわれていた事ではあるまいか。

「五街道取締書物類寄拾六之帳」⁽²⁷⁾によると、文政五年閏正月に大坂町奉行の懸合として、阿蘭陀人通人馬は大坂表過書町長崎屋重作が請負っているが、彼は通日雇請負仲間に属していない。

諸家道中通日雇請負の者は、先頃に達があつて、請負先の姓名、発足日限と請負人の名前、住所を其度毎にすべて

年行司から御役所に断り出している。従つて阿蘭陀人通人馬についても上町組、川西組通日雇仲間年行事が、長崎屋重作請負の内に仲間を加えれば道中筋申渡が徹底するとして、請負を願出た事実がある。この事は文政四年以来江戸六組飛脚屋仲間が營業を届出ているのと同じ手続が実施されている事を示している。

しかし阿蘭陀通し人足請負は長崎屋が、献上物其外諸荷物人馬は阿蘭陀人献上率領小川善之丞が、数代相統して請負っているので、日雇仲間の請負参加は長崎屋の差支のない場合に限り相対で行なうべきであり、従来通りの場合には長崎屋に日雇の者の取締を申渡すべきだとされた。

結局は長崎屋と小川が「殊諸家様御通行之御振合と阿蘭陀人通行之振合とハ格別相替候儀ニ而、別而被仰渡之御定目之御桁々も御座候」と主張して従来通りに落着し、仲間は請負っていない。

大坂の場合に慶応元年閏五月二四日付達「三郷地日雇之儀、急御用之節、右渡世之重立候者致世話、為加勢為雇出候様可致事」によると、三郷地日雇が臨時継立人足に使用されている。従つて実証はないが大坂でも江戸と同様に通日雇と日雇、通日雇請負と人宿とは類似の性格を持っていたのではあるまいか。

ところで近藤典二「鳥栖地方の宿場(長崎街道の田代・森木・中原)」によると、万屋喜平次は福岡藩の日雇支配である。また米屋清六は佐賀藩日雇頭として嘉永元年に藩主帰国の中国路通人馬を請負っている。

前者は嘉永七年「大阪兩組通日雇仲間名鑑」の川西組常安裏町万屋喜平次であり、文政四年には恐らく常安裏町紙屋五郎兵衛支配借屋万屋権次郎であろう。

後者は嘉永四年には江戸の六組飛脚屋京橋組三十間堀二丁目鉄蔵店米屋清六である。安政元年一二月、万延元年閏三月には弓町鎌次郎店である。今後個々の請負人について具体的な姿を求めなければならない。

明治政府の下で明治元年七月九日に株仲間に代つて商法会所から新規株札が下附される事になり、「諸鑑札数目」

によると明治元年辰八月二四日に通日雇上町組五二枚、同川西組三三枚を下付されている。なお同辰十一月二四日に男女奉公人口入仲間五六枚がみえている。

四 伏見

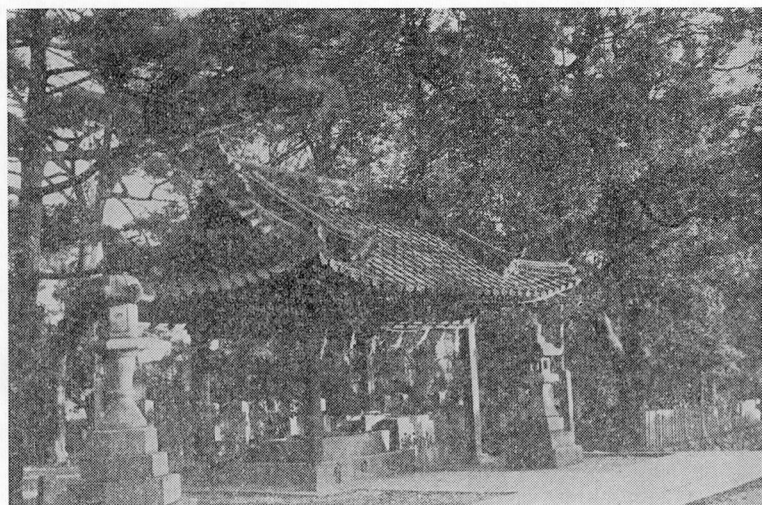
伏見の御香宮には参道右側に第二図のような御手洗がある。拓本の際の不手際から一部に不明確な字があるが、石井桁の正面に「斯水神霊」、右側面に「西浜運送屋中」、裏面に「天保十五年歳次甲辰、栞八月中辭新造、世話方、近江屋小兵衛、鉄屋吉兵衛、尼箇崎屋善兵衛、日野屋喜太郎、北村喜兵衛、大和屋莊兵衛、山城屋市兵衛、竹屋源三郎」と彫っている。

つぎに石井桁の左上に附いている石樋には、正面に橘の紋章、右側面には現在石井桁に石蓋が置かれている為の一部が不明となっているが、「京都□、石□、天□、石□」の彫文字のみが見える。天は天保であろう。

石手水鉢の正面に「奉寄進、御香宮前石盥盤、盥漱清浄至誠致虔、神功永禱靈庇万年、正徳元年辛卯十二月吉祥日、伏見与力、横田助社、岡田正房、津田豊封、長瀬正上、伊出宗恒、杉山好広、小泉明貞、蘆谷重規、三輪則茂、大嶋参忠」とあり、裏面には「正徳所寄附石盥盤、再磨石巧而新清潔、之伝永世已矣、肯、天保十五甲辰九月、伏見与力、小泉伊織、岡田祐之進、小野三十郎、岡田耕之恵、大島勘助、棚橋慎平、杉山左右介、村井平三郎、津田貞三郎、横田孫太郎」とある。

石枠が石手水鉢の周囲に、石井桁と接触する右側を除いてあり、その正面に「伏見」と縦書きし、続いて「通日雇」と横書してあり、裏面に「天保十五年、辰八月、石工、大松」とある。なお読点は改行を示す。

この事は正徳元年一二月伏見与力が石盥盤を寄進し、天保一五年九月にこの石盥盤を伏見与力が再び磨石した際



第2図 伏見御香宮御手洗

に、伏見の西浜運送屋が石井桁、伏見通日雇が石水盥の周りの石枠を八月に寄進した事を示している。

石樋も八月ではないかと推測される。京都の下の不分明は推測出来ない。

少なくともこの御手洗は、伏見与力、西浜運送屋、伏見通日雇が密接な関係にある事を示している。

伏見通日雇は寛政元年一二人⁽³⁶⁾ 同二年一〇人新規加入して二人⁽³⁷⁾ 文政四年には二人である。通日雇仲間の前身には、延享四年三月道中取締御触の伏見請書にみえる御大名様方人足請負人が入っているだろう。⁽³⁹⁾

西浜運送屋とは西浜運送問屋の事で、伏見の西浜にあり、伏見の京橋運送問屋と共に京阪間と近在の水運を握っていた。取扱品は米穀、材木、塩、醬油等である。多くの大名の用達を勤め、本陣、脇本陣を営む者もあり、諸侯から扶持米を給せられた者もあった。一部には伏見材木問屋を兼る者もいた。⁽⁴⁰⁾ 安永八年序、安永庚子春跋「伏見鑑」上巻によると四八軒で、天保二年以後の職業調では安政二年五月には四〇軒である。⁽⁴²⁾

宮本又次「福岡藩と大阪との関係史料紹介―特に蔵屋敷関係

史料⁽⁴³⁾」に紹介されている筑前国福岡藩の「大坂御役所勤仕方聞書覚」は同藩大坂中之島の蔵屋敷の史料で、宝暦元年以降のものと推測される。

その内に延享五年五月一四日に改め、津嶋屋弥吉郎が請合書物を提出した「大阪々江戸御屋敷下之物日用津嶋屋弥兵衛請合直段」は第一・二表の通りである。

津嶋屋弥兵衛は聞書の内の「定格米銀渡り并被下物之覚」に拾人扶持、伏見津嶋屋弥兵衛とあり、「五街道取締書物類寄拾六之帳」⁽⁴⁴⁾によると文政四年には伏見通日雇仲間下油掛町津嶋屋弥兵衛としてみえている。

第1表 津嶋屋大坂・江戸町便付合直段(延享5年)

種 類	御 状 箱 壱 ツ 賃 銀	御 荷 物 貫 目 賃 銀
六日七日切	銀 17.4	匁 13.5
七日八日切	2.5	10.3
八日九日切		8.6
九日十日切		7.5
十日十一日切		7.0
十一日十二日切		6.8
十二日十三日切		6.5

第2表 津嶋屋大坂・江戸通日用直段(延享5年)

種 類	日 用 壱 人 賃 銀	六 貫 目 賃 銀
六日切	銀 87.8	匁
六日七日切	115.5	
七日八日切	83.0	
八日九日切	79.1	
九日十日切	75.3	
十日十一日切	71.1	
十一日十二日切	66.9	
十二日十三日切	62.7	
道中日延		3.9
本陣泊り		5.3

なお前記覚には銀式枚 尾張屋七

兵衛とある。これは寛延改正「増補改正難波丸綱目」に御大名人足請負方とみえる、大坂の玉水町尾張屋七兵衛の事であろう。

第一表⁽⁴⁵⁾に戻って、六日七日切御状箱については「但御状箱重目五百目迄、其外百目ニ付銀四匁八分宛割増」とあり、七日八日切御状箱にも「但御状箱重目百目迄、其外百目ニ付銀壱匁宛割増」と但書がある。荷物については「但水物、われ物、植

木類、過荷、難義致品、長き物、かさ高成物、詮議之上臨時増銀遣ス」とある。

第二表では六日切に「但六日切ハ御荷物請合難仕、御添飛脚又ハ才料供ニ召連候節、御請合可申上候、尤御荷物三貫目持」とあり、六日七日切以下については「但御荷物六貫目持、其外右賃銀割を以御増銀被下、道中川越賃留具棒共弥兵衛ノ支配仕置、尤御荷物貫目無之かさ高成物、或ハ沓箇ニ付拾貳貫目ノ以下之御荷物ハ詮議之上臨時増之銀遣ス」と但書をしている。

従って通日用は六貫目の荷物を運ぶのが規準である。道中の川越については請負人が支配し、渡川については雇主とは別計算である。荷物のおきさや重量により臨時増賃が支払われる。

道中日延、本陣泊りは共に六貫目が規準である。次に船川越賃を才料から払った場合には、六貫目沓人につき銀三匁貳分宛引下げる事を定め、更に才料無し荷物は道中宿に荷御敷料として沓指につき銀九匁宛としている。

刀指の日用を才料する者は、人品年配共に相応わしい者を差出すから、そのための日用賃金を請求し、その額は御荷物沓指か貳指迄は一人分の賃銀、三指以上は二人分、六指以上は三人分の賃銀であり、それを御荷物差立の翌日に渡される事になっている。

以上で津嶋屋の福岡藩関係営業を紹介したが、町便付合直段とある事は津嶋屋が自身でか、それとも提携でか、定飛脚ニ三度飛脚的營業に従事している事を示している。伏見の通日雇では一部に行なわれていた事ではなかったろうか。

五 京都

三井文庫蔵京都「御触写 四番」には、寛延二巳年正月六日に江戸への通シ人足の入札があり、希望者は同月一

・一二日の内で四時から八時迄東御役所で書付を写取り、一六日四時に披くから家持請人と共に入札を持参する事を命じており、同正月には京都から江戸迄の木曾海道の通シ人足一〇人を、「身元籠抹無之、随分丈夫ニ而山坂難所等駕籠昇馴候人足」として求めており、これも望の者は二五・二六日に丹波前御役所帳面で勤方書付を写取り、二九日五ツ時に札披をするから家持請人を連れて入札を持参する事を命じている事実がある。

他にこの種の触を留めていないが、通シ人足の採用には一般に入札方法が行なわれたのではあるまいか。⁽⁴⁶⁾
通日雇の請負手形は次の通りである。

請負申手形之事

御駕籠老挺式人懸り

一金三兩貳歩三百文

御道中欠放し

但し船川越し御払可被下候

内金老兩貳分三百文、京都ニ而慥ニ受取申候⁽⁴⁷⁾

残り金道中ニ而入用次第、御渡し被遊可被下候

右者從京都中仙道木曾路通り江戸迄、日数十三日十四日斗リニ御請負申候所実正ニ御座候、右之日限相延候ハ、賃金日割被成御増シ被遊可被下候、居逗留被遊候ハ、老人ニ付一日貳百五拾文ツ、可被下候、若此もの於道中取逃欠落仕候ハ、其品々相改急度相弁埒明可申候、又ハ不達者仕御用立不申候ハ、其所々能人替り為立御供為致可申候、為後日仍而如件

柳馬場通竹屋町角

安永八年亥四月三日

近江屋市兵衛[㊦]

松屋清左衛門様

これは京都から江戸迄十三―十四日間で中仙道木曾路を通る式人懸りの籠人足である。

近江屋市兵衛は文政四年には柳馬場竹屋町上ル町近江屋市兵衛として京都の道中筋通日雇請負仲間⁽⁴⁷⁾に属している。
次も同じく近江屋市兵衛の請負である。⁽⁴⁸⁾

請負申手形之事

一金三兩式歩也

御供附沓人

㊦

諸色御賄可被下候

内金沓兩式分京都ニ而飴ニ受取申候

残金道中入用次第御渡し可被下候

右者從京都中仙道木曾路通南部迄、御請負申候処実正ニ御座候、万一日数多ク御懸リ被遊候ハ、能敷御心付可被下候、此者於道中取逃欠落仕候ハ、其品々相改急度埒明可申候、為後日仍而如件

柳馬場通竹屋町角

安永八年亥四月三日

近江屋市兵衛[㊦]

松屋清左衛門様

これは京都から中仙道木曾路を通過して南部迄人足沓人が御供をする訳である。

通日雇について(藤村)

右の二通の請負手形からすれば一般に半金近かい金額を京都で内金として渡し、残金は道中で入用の都度手渡され
ており、契約日数を超過する場合には日割計算で支払われている。又途中での事故や不都合の際には代人を予定して
いると言えよう。

同「御触留 八番」には天明四辰年六月付御触の一部に

一向後宿駕籠長持坏人足御定之通急度不相減、人馬賃錢旅籠代等迄無相違相払、陸尺并通し人足才領之者共ニ至
迄急度申付、自分ニ可持道具を人足ニ為持、其身ハ無賃之馬駕籠ニ乗候義不致、金銀等ねたり取候儀者勿論、
人足共々酒代等取之差戻し之儀者決而致間敷段、召連候家来并請負人共迄急度可被申付事

右之趣者兼而宿々江申渡置、右駄之取斗有之節ハ道中奉行へ訴出、詮儀之上家来并請負人等迄急度可相否候条、
其旨可被相心得事

右之趣向後急度可被相守候、縦組中支配并家来不法有之候共、其番頭御役人主人之越度ニ可相成候間、其旨可被
致もの也

六月

とある。武家の道中での通人足、請負人について一般的な触であるが、御書付が江戸から到着したので洛中洛外に
触る旨を辰七月付で記るしてある。天明四年については私には未見のためこれを記しておく。

つぎに同「御触留 拾貳番」の文化九年に、寛政元酉年一二月付の次の触書がある。

道中筋ニ而通シ日雇ひ之者共へ小揚取并無宿者等金錢ねたり取、不遣候得ハ仇ニ致難義ニ付、右駄之義無之様道
中奉行が宿々江相触、江戸表通し日雇之仲間取極有之候条、於當地も通し日雇受負仲間相定道中筋取極之義申付
候、依之東海道木曾路甲州路佐屋美濃筋宿々江右仲間之ものとも印鑑差出置、日雇共へ印札為提往来為致候管ニ

候間、以来仲間外者通し日雇請負候へ、右之仲間年行司之内へ談、印札借受差下可申候、尤年行司共江引合候へ、道中筋取極之義得と及応対、就右懸りもの等為指出席様申付置候条、其旨可相心得

とある。即ち寛政元年に江戸にならつて京都でも通し日雇請負仲間が仰付けられ、道中筋に仲間印鑑を渡し日雇には印札を揚げさせて仲間外の者への対策としている。

仲間人数は同年八月には一六人であるが、山梨県北都留郡上野原市、平子君平氏所蔵の同年十二月「〔京都道中通日雇請負仲間印鑑帳〕」は前記の道中筋宛の仲間印鑑に当ると推測されるが、これでは寛政元己酉年九月一三日に京日で道中筋通日雇請負仲間が定められたとして一四人の所名前がある。この減少については後考にまちたい。

右の寛政元年の触に引続いて、文化九年一〇月付で

右之趣寛政元酉年十二月相触候、当分相守候者も有之候得共、其後近來猥ニ相成、仲間外之者請負致通し日雇仲間へ引合ニ罷越候者無之、諸家へ立入候者之内ニハ心得違候者も有之趣相聞得不埒之事ニ候、以来右駄心得違無之様兼而触置、急度可相守候

として仲間外の業者が存在している事がわかる。そして文化九年には仲間は一一人である。つぎに文政四年には一三人である。⁽⁵¹⁾この寛政元年、文化九年、文政四年の仲間の内一〇人は連続している。従つて前記の仲間外の者の加入は積局的には行なわれていなかったと考えられる。

なおこれ以後では、文久三年癸亥夏換書堂主人序「文久改正京羽津根」⁽⁵²⁾によると諸国通日雇請負仲間五人、文久四年甲子初春刊、練要堂主人序「都商職街風聞」⁽⁵³⁾では諸国通り雇請負仲間として五人、元治元年甲子夏換書堂主人序「元治改正京羽津根」⁽⁵⁴⁾は五人、同慶応三丁卯夏改正「慶応改正花洛羽津根大全」⁽⁵⁵⁾は五人である。同明治四辛未冬改正「明治改正京羽津根」⁽⁵⁶⁾には諸国通日雇請負仲間の記事は見当らない。

再び近世に帰って「五街道取締書物類寄拾六之帳」⁽⁵⁷⁾にある文政四年京町奉行宛石川主水正懸合によると、京都でも江戸と同様に請負先の姓名、発足日銀、受負人名前住所をその度毎に年行司から届出る事になった。なおこの届出は仲間以外の者が撰家方、官方、門跡方、堂上方から請負った際にも実施する事になっている。

そして同「御触留 十三番」には、文政七年九月に同巳年に道中通し日雇について触れたがと断った上で、素人で上下渡世の者を置くか、通し日雇を請負う者は仲間に加わすべき事を命じている。前記幕末の仲間人数からすれば実現しなかったと考えられる。

つぎに「五街道取締書物類寄拾六之帳」⁽⁵⁹⁾の文政八年八月京町奉行と道中奉行との懸合、答によると、江戸の六組仲間通日雇請負人が諸家旅行で京都に廻った際に撰家、官方、武家方の内手廻りと称して七、八人連で酒肴を通日雇の下宿に差出し、戻すと口論や待伏して通日雇の宰領に金子をねだる。更に諸向手廻り部屋と人宿三拾六軒組合の内の者が酒代をねだる筈として取扱の金を求め、拒否すると矢張り七、八人がきて口論をしかけて宰領から金をとる。

そこで京町奉行所は京都諸奉公人口入仲間を呼出し不筋のない様に申渡し、小前の者にも同様の申渡をしている事実がある。

この事実の内では撰家等の諸向手廻り部屋とは、既に文政四年に仲間外の者が撰家等から請負っている事は前記の通りであるが、彼等の事ではないかと推測されるし、更に諸奉公人口入仲間、人宿三拾六軒組合などがある事は、京都でも地日雇・人宿と通日雇が類似の性格を持っていたと考えられる。

従って単なる金子ねだりだけではなく、営業上の争としての性質も一面では持っていたのではあるまいか。

京都を含めてこの人宿との関係については、弘化四丁未孟秋柴山加治禎胤序「諸国道中たひ鏡」⁽⁶⁰⁾により考える。同書には御屋鋪方通シ日雇人宿請負人として京都には尾菊屋辰五郎、山田屋喜兵衛、大塚屋久五郎が記るされ、いずれ

も人宿と肩書がある。しかし三人とも前記文政四年の京都の道中筋通日雇請負仲間にも、文久三年の諸国通日雇請負仲間にも見当らない。

同じく大坂は政田屋権次郎が記るされており、矢張り人宿と肩書がある。彼は嘉永七年には上町組に属している。伏見は通日雇請負人の肩書で津嶋屋弥兵衛、津国屋徳兵衛、津国屋九左衛門が記るされている。津嶋屋は文政四年の伏見通日雇仲間に見えてゐる。津国屋もあるが名前は合致しない。

つぎに江戸については道中通シ日雇請人として二人あり、田中康雄編「江戸商人名前一覧」によると内一人は番組人宿でその内の二人は六組飛脚屋ではない。つぎに二人は人宿、六組飛脚屋共に見当らない。御屋敷方人宿請人として一七人あり、その内で二人は前記の一覧には見当らない。また二人は六組飛脚屋を兼業している。御屋敷方人宿請人の肩書を整理すると、人宿四人、陸尺入口三人、下座見・入口四人、徒士入口一人、忒方入口一人、通日雇受負人一人、手廻入口一人、煮出し二人である。

以上の事は江戸、京都、伏見、大坂共に通日雇は人宿と似た性格があり、仲間以外の者でも通日雇と同程度の者が多かったと考えられる。

六 通人馬御請負証文

中根雪江「再夢紀事」坤の文久二年七月二五日に松平春嶽が幕閣に提出した七月付御上洛に関する建議書⁽⁶⁾には、

先ッ御供之義ハ両山御参詣之趣ヲ以御取調ニ相成候ハ、何時ニ而も御差支ハ有之間敷候、御供之面々も成丈ケ壯年之者被召連何れも歩行たるへく、無抛向五十已上或ハ痛所有之面々ハ通し日雇の山駕に乗り可然候、大身ハ鎗老本手廻り一人両掛一荷たるへく、小身ハ鎗一本両懸片方ニ而も可相済候、左候ハ、御役人に帰すべき限も

有之間布候、万石已上之供奉も右ニ准し御府内供連之振合を以致省略候ハ、及疲幣候程の迷惑も有之間敷候、
叔道中筋之義ハ昨冬之御下向と違ひ、御朱印之継立を被相止、寄郷等之苛政を省き、宿継人足有合之外ハ通し日
雇ひ人馬ニ相成候ハ、宿駅之困窮小民之煩ひにも相成間敷（下略）

とあり、將軍の通行に際しての助郷、宿継人足、通人馬の關係が語られており、ここでも通日雇は予定された存在である。大名の参勤交代についても同様であらう。

大名の場合について比較的詳細に記している、日本經濟史研究所蔵「通人馬御請負証文」⁽⁶²⁾は、年月、差出人、宛名を欠いているが、内容からみて文政三辰年のものと推測される。下書か、控と考えられ、具体的な使用については不明である。内容は次の通りである。

(一)江戸御屋鋪から東海道、伊勢路通で伏見迄の日数一四、一五日限の御道中の場合、御参府の伏見から江戸御屋鋪迄の場合も同様である。なお日数は「伏見、大坂并於御道中」で仰渡されても前後一日の延縮は増銀を申請けない。

第三表は江戸・伏見間の宍人当り賃銀であり、平日雇から平鎗持までは「内式匆宛御直引仕可奉相勤候、万一川御支等御座候者、御増銀之儀者本行賃銀三割引を以可被下置候」、「但御荷物何ニ而茂六貫目持其外御割合を以可被下置候」とある。御葛籠馬、通し馬は一疋について、御本陣宿は一人についてである。

第四表は第三表についての増銀である。従ってこれも宍人について六貫目平均持の賃銀である。表示した他に、美濃路通行の場合には増銀は申請けない。脇道廻は往還里数を差引いて延長になった分の里数について、宍里宍人につき増銀二匁五分宛とし、「但下路何方ニ而茂右同様御立可被下置候」としている。そして所々御通廻道については、通馬は人足式人前とする。

以上で道中についての増銀をおわり、つぎに各項について列記する。

第4表 江戸・伏見間増賃表

種 類	六貫目持人 平均増賃 銀	通正銀 匁宛	馬付増 銀	老 人 正 賃 銀
鎌倉廻り	2.0	7.0		
江之島廻り	1.8	5.6		
箱根権現廻	0.6			
本坂廻	4.5	11.0		
佐谷廻	4.5			
伊勢廻	15.5	31.0		
京都廻	4.5			
枚方廻 老日着	10.0			
枚方廻 式日着	15.0			
老人=付増銀				
伊勢大和伏見 御着=茂大坂 御着=茂	9.0			
石山寺	0.9			
三井寺	0.9			

第3表 江戸・伏見間賃銀表

種 類	老 人 正 賃 銀	通正銀 匁宛
平 日 雇	94.5	
八人掛御陸尺	119.2	
六人掛御陸尺	119.2	
四人掛御陸尺	108.0	
三人掛御陸尺	108.0	
式人掛御陸尺	119.0	
上 通 人 足	97.0	
上 奴 子	119.0	
中 奴 子	116.0	
平 鎗 持	85.0	
御 葛 籠 馬	718.0	
同 装 束 代	75.0	
通 シ 馬	金 8兩	
御 本 陣 宿	銀 7.5	

通日雇について(藤村)

- (1) (道中旅行の道法) 一日の里数一二里迄は「無実義」、「其他」は日雇六貫目持夫一里一人につき式匁宛、通し馬は一疋につき六匁宛である。
- (2) (夜通追越) 「無実義」勤める。
- (3) (御物様から家中下置の持夫) 一三貫目持て賃銀は一人につき一一〇匁宛である。
- (4) (御自分御雇者) 貫目に関係なく老人につき九〇匁宛、日数は一五日限で請負う。若し所定の日数より延びた場合には、一日は御差引にし、重日数の分は日割賃銀とする。川支による居逗留で日数が延びた場合には一日は御差引とし、重日数は日割賃銀の三割引とする。
この点は中国路についても同様である。
- (5) (御旅方、御台所御荷物の前日立) 増銀を申請けない。
- (6) (道中川留が続いて御金差支) 道中では御金を申請けない。御着の上で受取る。
- (7) (御葛籠馬) 両口の内平人一人前の賃銀を下される事。
- (8) (通シ馬) 随分丈夫な馬を吟味し、装束も見苦しくない様にし、御発駕の三日以前に御見分に差出す。

(9) (通シ馬口附の者) 見苦しくない様に髪月代を時々させる。

(10) (通人馬御用代金) 三分の一を始めの御泊で渡され、残金は道中で追々に貸下され、首尾よく勤めた上で皆済にする。

(11) (御時節違による通人馬直段高直) 御定直段より増銀願はしない。

(12) (御鋪金) 御発駕の一〇日前に金二五〇兩を差上げ、首尾よく勤めれば返却して貰う。万一滞った場合には召上げられても異儀はない。

(13) (川支による居逗留で御定日数より延びた場合) 前述の通りで、一日は御差引にし、重日数は日割賃銀の三割引とする。

(14) (兩替小判金六拾匁直成) 代金は六拾匁直成の小判で下されたい。万一金子が差支て銀子による払の場合には小判金相場直成で実施する。

(15) (御道中での火事騒動) 人足の召連れと、人々からの請取御荷物は御宰領衆の差図次第にする。

(16) (御道中御備御供の人足) 髪月代を時々させ、外見を見苦しくない様にする。

(17) (御道中での通人足) 万一人足が取逃れて欠落した場合には、事情を調査した上で速かに「相弁上納」する。又途中で意にみたくない人足があれば、其所で能ある人足と替えて差支ない。その外に通人馬について如何様の事が出来ても引請けて処理する。

(18) (人足統制―御家中の下知に背いた場合) 打擲されて身に疵を負っても、下知に背き誤っていた場合には、譬御公辺に訴訟しても一言の申訳もしない。また養生料等を要求せず請負人の方で引請けて御屋鋪には迷惑をかけない。つまり御家の御作法を遵守する。⁽⁶³⁾

(19) (道中増加荷物賃錢) 御買物が到来物で荷物が出来た時、纔の品物であれば重賃銀は申請けない。格別の貫目とか高きとかの物は掛改の上で重賃銀を下されたい。

(20) (主取三拾貳人平人足賃銀五匁増ニ可被下置候) この意味は現在の所では私には不明である。但書があり、文化一三子年迄はこの主取の者に宿々割増銀が下されたが、同一四丑年御下国の際からは下されなくなっていた。

(21) (日雇の者の着替附用馬継賃銀) 本馬一六疋継賃銀を下されたい。但書として数年来「御物御規」の継賃銀を下されていたが、文化一四丑年御下国の時からは道中宿々継賃銀で下されている。

(22) (御出戻り) 一里一人につき式匁五分宛を下されたい。

(23) (御参府の際に、大坂、伏見で滞在の結果「御定之日数相重」った場合) 主取の者一日一人につき式匁八分宛下されたい。

(24) (御関札違と追越) 増銀を申請ける。

(25) (船川越等) 御屋鋪から払う事。⁽⁶⁴⁾

(26) (所々渡船) 沓艀を下さる事。

(27) (所々川越札) 七五枚を下される事。

(28) (御褒美銀) 首尾よく勤めたら銀一〇貫目拝領を仰付けられる事。

(29) (東海道通人足えの増銀) 東海道人足一人に継人足一人分の増銀を仰付けられ、これ迄四割増賃銀を下されたが、駅々割増の事は時々替るから、今後は御通行の際の割増を掛けた所で通人足一人え継人足一人分の増賃銀を下さる事。

但書があり、数年来通人足一人え「御物御規」の継人足一人分の割増銀を下されていたが、文化一四丑年御下国

の際から宿々割増銀を下されていた。

(30) (直引) 通人足御用を請負い、去る文化一四丑年から賃銀の内東海道については、一人につき銀二匁宛直引を仰付けられた。その勘定は従来通り人夫高を締めた上で直引をする。御本賃銀はその儘にし、本行直引の理由は内書に記るして提出する。

中国路も同様にされたい。

(二) 播州室津・坂越から大坂迄御道中日数三日、四日限の場合。

道中での前後一日の延縮については増銀は申請けない。陸尺等の賃銀は第五表の通りである。平日雇については「但御荷物何ニ而茂六貫目持、其外御割合を以可被下置候」と但書がある。

室津、坂越は瀬戸内海の上陸、乗船場である。

(三) 大坂から長州下之関迄御道中日数一五日、一六日限の場合。

一五日常行の時に道中での滞については、一日の日延であれば増銀は申請けない。一六日常行の時には不時の滞であつても、一七日には規定通り増銀を下されたい。

御参府の際の下之関から大坂迄は、日数、賃銀共に同様である。

陸尺等の賃銀は第六表の通りである。表中平鎗持の賃銀は単に「九拾三」とのみあるが同表の様に解した。そして陸尺から

第5表 室津・坂越、大坂間賃銀表

種 類	元・賃銀	
	老 人 ニ 付	宛 宛 宛
掛 八 人 尺 陸 御	銀	38.4
掛 六 人 尺 陸 御		38.4
掛 四 人 尺 陸 御		34.0
掛 三 人 尺 陸 御		34.0
掛 二 人 尺 陸 御		39.0
雇 日 平		27.0
足 人 通 上		28.0
子 持 奴 中		34.8
馬 代 籠 平		25.5
馬 泊 束 葛 御		335.0
馬 泊 陣 本 通 御		45.0
		180.0
		1.3

第6表 大坂、下之関間賃銀表

種 類	金・匁 二付賃銀	
	匁宛	銀
尺 陸 御 掛 人 八	136.0	
尺 陸 御 掛 人 六	136.0	
尺 陸 御 掛 人 四	122.0	
尺 陸 御 掛 人 三	126.0	
尺 陸 御 掛 人 式	142.0	
尺 陸 御 掛 人 平	97.5	
足 人 通 上	103.0	
子 奴 上	160.0	
子 奴 中	142.0	
持 鎗 平	93.0	
馬 籠 御	730.0	
代 束 同	50.0	
馬 陣 通	660.0	
泊 陣 本 御	7.5	

候処、淀より山崎通へ懸ケ尼ヶ崎へ出、旅行被致「候」面々多有之由、然処山崎道之儀は脇道之継場故、人馬も少く、雇人馬等致継合候故、自耕作も怠候様相成及困窮候趣度々申立候、脇道通行多相成候ては、本海道之詮も無之事ニ候間、向後可成丈本海道旅行可有之候、若勝手を以山崎道旅行候共、右は脇道之事ニ候条、人馬継合差支之儀有之候間、可被得其意候、

右之趣、可被相触候

閏十二月

とある。即ち中国、四国、九州の諸大名が参勤交替に際して山崎道を脇道ではあるが利用している。翌同五申年五月には同趣旨で「向後万一勝手を以山崎道旅行有之度面々ハ、木曾路旅行同様相願候上、旅行可有之候」と触れられている。

通日雇について（藤村）

平鎗持迄「内式匁宛御直引仕可奉相勤候、万一川御支等御座候は御増銀之儀者本行賃銀三割引を以可被下置候」と東海道と同様の内書があり、平日雇にも東海道同様に荷物六貫目持で、それ以上は割合による旨の但書がある。

次に伏見から山崎を通つて西宮迄の増銀は一日着が一二匁、二日着が一五匁、通シ馬一疋三〇匁である。

この経路は安永四年閏一二月付御触によると、

中国、四国、九州より参勤交替之面々、前々ハ伏見、淀、牧方、守口、大坂、尼ヶ崎、西宮、兵庫と通行有之

廻道として石宝殿廻りが平均一人につき賃銀一匁三分宛、曾根松廻りが同一匁三分宛、尾上・高砂廻りが同九分宛である。これらは当時の名所である。⁽⁹⁾ 高砂は港でもある。

(例)伏見から山崎通で備後国尾道迄日数七日、八日限の場合。

道中前後一日の延縮には増銀を申請けない。陸尺等の賃銀は第七表の通りである。平日雇には東海道同様の但書がある。

これは尾道で乗船する場合であらう。

(田)御帰国の際には江戸・大坂、御参府の際には伏見・下之関の御発駕の御定日を仰渡された上で日限が延びた場合には一日につき一人銀二匁宛、通シ馬一疋銀四匁宛とする。

次に但書として増銀について

第7表 伏見、山崎通、尾道間賃銀表

種 類	老 人・足 人 付 賃 銀	
	銀	匁宛
平 日 雇	66.5	宛
御 陸 尺 八 人 掛	85.8	宛
御 陸 尺 六 人 掛	85.8	宛
御 陸 尺 四 人 掛	78.8	宛
御 陸 尺 三 人 掛	80.8	宛
御 陸 尺 式 人 掛	88.8	宛
御 上 通 人 足	69.3	宛
上 中 奴 子	97.5	宛
平 中 奴 子	88.8	宛
通 鎗 持	64.3	宛
通 シ 馬	4 両 3 歩	宛

(1) (江戸) 御発駕七日以前に日限延期を仰渡された場合には増銀は申請けない。

(2) (伏見、大坂) 東海道、中国路共に両地の五宿御泊以前に日限延期を仰渡された場合には増銀を申請けない。

(3) (下之関) 人足は播州、備前、安芸、其他の遠国から御発駕御定の積りで寄集めるから、下之関について仰渡されている日限から延びる場合には増銀を下される事。

(4) (御帰国、山崎通枚方筋御通行で、伏見に人馬を召集めた上で日限が延びた場合) 一日一人につき銀式匁宛、通馬一疋につき銀四匁宛

を下さる事。

(5) (御参府、大坂から枚方筋御通行で、大坂に人馬を召寄せた上で日限が延びた場合) 一日一人につき銀二匁、通馬一疋につき銀四匁宛を下さる事。

としている。以上の事からすれば江戸、伏見、大坂、下之関が人馬手配集中の地点であり、当然江戸、伏見、大坂及び伏見の周辺としての京都に、通日雇仲間が人宿及び都市と云う性格も加って成立する事情が理解出来る。下之関については後考にまちなたい。

(内) 請負年限中に臨時の御出府・帰国の際には、本文御定の日限直段で請負う。また時節遣で通人馬が高直になっても御定直段により処理し増銀はとらない。それから何様の故障があっても少しも訴訟がましい事はしない。

(外) 以上の但書は、文化一四丑年の御下国の際から御賃銀割増銀その他のケ条書等が替ったので、その点を記した。

最後に右は当辰年(文政三年カ)に御参勤通人馬請負を仰付けられた際のもので、「為後日請負証文仍如件」と結んでいる。

以上の事からすれば、この請負証文は恐らく江戸の通日雇が九州の某大名の参勤通人馬を請負った際の案紙ではあるまいか。そして通日雇の京、大坂、伏見の通日雇も業務内容は同様であろう。

さてこの請負証文の対象としている街道を使用しない東北の大名にも通日雇は雇われたものではあるまいか。天保五甲午歳仲秋序、仙台藩桜田廼「可驗録」卷之三⁽⁶⁸⁾には、或る東国の大諸侯の江戸参勤について、足輕と「その外徒士及駕籠廻の士に至るまで、武芸の能なき腰拔者」ときめつめ、「江戸往来にも右実用を主として国人を用ひ、町人足を用ひずんば御城下馬前并諸侯同士の無礼もやみ、辞讓の風ともならん歟」とある町人足は通日雇で、それも余り統制

がとれていない事を示しているのではないだろうか。

七 参勤交代

参勤交代については本庄栄治郎「参勤交代制度の沿革」⁽⁶⁹⁾に詳しいが、本稿ではその概略をたどるに止める。

慶長二〇年・元和元年乙卯七月日付「武家諸法度」⁽⁷⁰⁾ 寛永六年九月、同一二年六月二日⁽⁷²⁾ 寛文三年五月二三日⁽⁷³⁾、天和三年七月二五日⁽⁷⁴⁾の武家諸法度に関係項目がみえており、既に初期から実施されていたが寛永期に制度として確定し、大名は領地との結びつきを弱め、財政的にも経費を要し、幕府の中央集権政策を促進したとされている⁽⁷⁵⁾。

ついで「享保通鑑」によると享保七年には財政建直のため「御恥辱をも不被顧、被仰出候、高倉万石ニ付米百石之積可被差上候」と上米を命じ、代償として「依之在江戸半年宛被御免候間、緩々致休息候被仰出候」として半年在府、一年半在国となった⁽⁷⁶⁾。同一五年には復帰のための調整処置がとられ、同一七年には旧態に復した⁽⁷⁸⁾。

享保期の武家奉公人と参勤交代について、「享保通鑑」⁽⁷⁷⁾には享保六年丑年九月二六日付触に

一 参勤之節、従者多召連不申事

一面々参勤ニ従者多召連候事、何之謂ぞや、家来計召連候ニも非ず、町より奴之手振、今様風流なる者を雇、分限不相応之人を召連、身をかざり、他人の見分をよろこばしむる事、無益之奢、向後慎可然事

一 雇人足仕間鋪事

面々当時軍役之人を不持、手前家来ニ町人之丁者を雇ひ相受、軍役相勤候段、言語同断、武之上ニ此体之品可有之儀ニ無之事也、向後道中者不及言、在江戸共ニ急度其高ニ応じ、軍役之人を所持可相勤、人不足有之面々者領地より招呼、軍役之通召置、雇人之体、堅相慎可申事

とある。参勤に従者が多く、その内には町から雇入れた町奴がいた事が知られる。江戸でも事情は変らない。従って通日雇は町奴的な性格を持っていたのだろう。

事情は旗本でも似ている。これより先、室鳩巢「兼山秘策」第一冊の正徳三癸巳二月一日付の風俗により物価騰貴の条には、「御旗本の衆中当地にて召連れ候供の者を初め、或は御役により、或は御使に付て、遠所へ往来の人数多く成候事（中略）、殊に遠来の往来にはその人数も多く成候て、日傭雇の者など申輩を召加へ候得ば、其物入多く出来候事は不及申、道中宿々の為にも不宜事共も有之候」とある。通日雇はここにも顔を出している。

幕末の文久二年に参勤進献衣服等改革の発令があり、元治元年の復帰については原伝蔵「元治元年参観交代及妻子在府制の復旧事情」歴史地理三三卷二号に詳しいが、結局は余り実施出来なかつたようである。

八 紀州藩の場合

明治三一年序堀内信編「南紀徳川史」⁽⁸³⁾卷之百四十六典礼第廿二の「御登城御参詣及御行列に関する図式」の内の三十二図の供連れ其他旅行の体裁の雑写には、合羽籠、竹馬、両掛、差荷具足などあるが、両掛の所に「是等の人足は足付と称し通り雇入之者にて宿継人足にあらず」と註している。彼等足付は通日雇である。

「同書」⁽⁸⁴⁾卷之百四十五典礼第廿一によると寛政二年二月方姫君江戸御下向に際して、御道中御先荷且御当日筋荷物人足の内に、御当日分で御挾箱五荷の内一荷持人は通し日雇、女中对挾箱二走と同長刀一振持人は「但手代り共通し日雇」である。また御供女中乗物昇御中居以下又下女迄駕籠昇人数では青漆乗物二挺（一挺六人掛り）、座包乗物八挺（同四人掛り）、駕籠一四挺（同二人掛り）は何れも通し日雇と註している。

一般の武家旅行での通日雇の人足の割合は残念ながら確認していない。

は、彼等について東海道守口宿の嘉永三年八月「紀州様御家中方平日御通行日雇之儀并諸家様御飛脚方之儀書上帳」に

一紀州様御当日は、御取締御厳重ニ而宿助郷共一同難有奉存候、然ル処平日御家中様之内御大臣様方御通行之

節、付添参候通し日雇請負之者兎角無賃ニ而手代り人足為差出、其上長持等之賃錢御払高之内過半引上ケ人足相減し、途中継送り遅刻いたし候様と、少々之儀を御用差支候趣申立、無抛為御叱憐宿迄も罷出候有様に、兎角御威光強、宿助郷共難渋仕候

として、矢張り通日雇に宿場は難渋させられている。

紀州藩にとって通日雇の経費は、「南紀徳川史」巻之百九財政二によると、天保一四卯年日光御社参御入用は金一万二四一七兩で、その内で日雇分は金三二兩で〇・二六%に当る。他に駄賃金七八兩三分二朱、旅籠金一七七兩三朱がある。⁽⁸⁵⁾

慶応二年調の歳入出予算表は第八表の通りである。⁽⁸⁷⁾石金五兩積、銀方兩百目積による計算であるから納合総額は金一九二万七八三三兩になる。万払の項の内で日雇は金二九八九兩三步である。従ってこれは納合全体の〇・一六%、金銭分の〇・九%に当る。この他に旅籠金三六四兩一分、駄賃金四七八兩二分、木錢金二五二兩二分、渡り金一万一四七四兩二分、夫金路銀江戸詰被下金三〇二一兩三分、路銀払金八四九兩等がある。これらと日雇の合計は納合全体の一

第8表 紀州藩慶応2年歳入出予算表

項 目	米	金
納 合	石 31,9177	兩 分 朱 33,1948—0—0
払 総 合	31,9177	33,1948—0—0
内 訳		
御 定 金 米	,8270	,8350—0—0
御 家 中 御 宛 行	25,7350	2,4185—0—0
御 参 暇 御 入 用 宛	3,0000	
非常宛御備金米等	,4500	,8300—1—0
万 払	4,9057	26,1112—3—0

・八%、金銭分の一〇・五%に当る。日雇は参勤関係では纏った額である。

九 筑後国柳河藩の場合

安永初年と推測される柳河藩の「京都伏見大坂町人扶持調」に大坂の八幡屋八兵衛は老人扶持 但太米 米五俵とある。そして「先祖八兵衛義ハ好雪様御代々御出入仕、尤御参府之節御道中人馬御用並江戸江町飛脚御用等被仰付相勤申候、英山様御代延宝四辰年頃々玉造柏木町ニ有之候、抱石番被仰付候⁽⁸⁸⁾」とある。好雪は立花忠成⁽⁸⁹⁾の事で寛永一四年襲封、寛文四年致仕であるから、参勤交代の初期から大坂には通日雇の請負人があり、彼等は定飛脚Ⅱ三度飛脚を兼業していた事が知られる。唯し通日雇・町飛脚と称していたかは不明である。

つぎに同じく大坂の丸屋左平次の項には、宝暦四年御下向の際に大坂迄来たが、そこで中国路御旅用金が払底し、丸屋に内談し、問屋仲間四人と相談して金千両を整えて発駕したとある。⁽⁹⁰⁾丸屋は通日雇ではないが、柳河藩でも参勤入用に苦慮している事が知られる。

天保一五年卯月序三善庸礼⁽⁹¹⁾〔立花家柳河藩家中町野与左衛門〕「国家勘定録⁽⁹²⁾」には、「勤番交代之次第ヲ論」として参勤交代について、

参勤交代ノ入用ヲ詳ニセント欲セバ、先ツ、主人ノ御身回り一切ノ御入用ハ勿論、御供立臣下ノ面々上下ノ支度、旅用御渡米・御渡金・人馬ノ賃銀、渡川・渡海ノ船賃・渡賃、旅籠、通馬、通人足賃銀、駕籠代、目録・茶代等ニ至迄都テ是ヲ参勤交代ノ主用ト云ナリ、此外ノ諸入用ハ一々權拳スルニ不遑、往来ノ入用ノ数ヲ校量シテ是ヲ規則トシテ、増減ハ年ノ豊凶ニヨリ時制ニ随テ、格ヲ離レテ格ニ合フ如ク処置肝要ナリ⁽⁹²⁾としてゐる。いささか長文にわたって引用したのは、入用の費目を具体的に列挙しているからである。この内に通

馬、通人足賃銀がみえてゐる。

次に「人馬賃錢之御定ヲ正ノ論」には、人馬賃錢について、一里につき人は一六文宛、馬は三三文宛のものが、宿の困窮と共に割増が行なわれ、東海道は倍の高に、中山道も追々割増になっている。しかし尾州領一宿は割増がない。中国路、九州路も割増がないとしている。

通人馬は、通人足は足付と云うが、上、中、下人の区別があり一人賃の額は不明であるが賃錢に差がある。通馬は賃錢に差はない。そして「右人馬共ニ里數ニヨリ日數ニ依テ直段ヲ極ル事也、尤受負有テ夫々取計フ事也、通人足ハ播磨人ヲ上トシ、備ノ三州ノ人次之、又摂州人ヲモ用ルナリ」とある。

即ち通人馬には請負人があり、彼等が通人足を播磨、備前、備中、備後、摂津などから調達している。当然山陽道の各地の人足もいた筈である。この事は前記の通人馬御請負証文の下之関、大坂、伏見での人足手配の記事に照応している。彼等は中国路での人足か、東海道迄延長するかは明らかでないが、恐らく中国路での事ではあるまいか。

宿人馬は東海道は駅々一日に継馬五〇疋、継人足五〇人、中山道、中国路、三日路は継馬二五疋、継人足二五人が御定であり、すべての街道共に手雇はこの外になる。この問題は藤沢晋「近世交通史の一考察―参勤交代諸侯の人馬使用形態と継送り側の負担―」⁹⁹に詳細な研究があるので参照されたい。

馬荷は一駄三六貫目限りであるが四〇貫目迄は御用捨、分持は一荷五貫目限りであるが六貫目迄は御用捨、長持は馬荷と同様であるが人足八人掛りである。

長棒乗物は六人掛り、山駕籠（切棒権門駕）は三人掛り、障泥戸駕籠（乗駕）^{アラダ駕}は式人掛り、宿駕籠（アラダ駕）は式人掛りである。

最後に「船渡・歩渡之賃銀ヲ正ノ論」では、渡川は省略するが、渡海船は豊前大里から長州赤間関迄の五〇町と、

豊前小倉から摂州大坂迄の一三六里である。

この渡海船についての経緯は略すが、小倉の御用達血屋七兵衛、塩分屋又兵衛に命じて借船をする。それは船借銀を御国元から渡され操作して「手雇ニ相對ニ借受」ける。大坂からも同様で船借代銀を御銀役から渡されて、船を相對で借受けている。即ち参府には「尤風並次第中国路通行ノ届ヲ以テ、船借銀ヲ直受ニ致ス」としている。

船借は正銀で帆一反につき三〇目宛の御定である。列役は八反帆、平士は七反帆、無足相船は七端帆、大勢の相船の場合には帆を増して渡される御定である。即ち七端帆一艘代は正銀二一〇目となる。

渡海船について記したのは前記の通人馬御請負証文と関連しているからである。即ち九州の大名が瀬戸内海を航行してから陸上を参府する経路が伺える。

一方中国路にもこれは関係がある。それは「中国路通行の御渡方御定モ有ヘケレトモ、多此船借銀ヲ以テ旅籠錢・人馬ノ賃錢ニ致ス事ナリ、尤船借銀計ニテハ不足ニ及ベケレバ、作略シテ往来スベキ也、又云、御供立ニハ中国路ノ御渡方ノ御定メ有ナリ」と。

さて大正年間、樺島藩来編註「旧柳河藩誌」第五編⁽⁹⁴⁾には、文政五年九月から同六年十一月の間と推測される参府関係史料がある。その経路は柳河から大里道を通って、豊前国大里から瀬戸内海を渡り、摂州野田に上陸し、大坂から守口、伏見の京海道を経て草津、垂井、赤坂の中山道、ついで起、名古屋の美濃路を通り、宮から東海道に入って品川に至る。

入用金は「御参勤大里道東海道御道中御用金銀巻物請払御帳」によると、金一七二〇両と黄金一枚、御太刀一腰、紗綾一三巻を要している。

その内訳は第九表の通りである。表中で東海道万小払の項は虫損のため不明の箇所があり、金と銀は判明分のみを

第9表 文政期柳河藩参府道中入用金・銀表

項	目	金		銀		金	
		兩	分	朱	匁	兩	分
大里道御音物		6	1	0	662.20	7	1
東海道御音物		44	3	0	3695.85	106	1
問屋目録増賃錢渡		8	0	0			
美濃路増人足賃					409.04	14	3
大里道東海道御川方		35	3	0	9989.36	202	0
東海道通人馬渡方		275	0	0	751.63	287	2
御廻京渡方		8	2	0	1640.41	35	3
				+α	+α		
東海道万小私		64	0	0	5313.98	1065	2

第10表 文政期柳河藩・東海道通人馬渡方表

項	目	金		老日 人賃銀
		兩	匁	
東海道請負通馬疋夫 210 人証文前御定賃		275		
不破忠右衛門伏見奉行江使者駕籠 3 人合羽籠 1 人			8.00	3.30
大屋十左衛門兩掛 2 荷夫 3 人半 (18日)			11.55	3.30
老中廻御添肩 4 人 (1日)			12.80	3.20
御添肩 4 人 (1日)			42.48	10.62
幸丸勘助駕籠 4 人 (1日)			35.00	8.75
堀江宗有駕籠 4 人 (1日)			18.00	4.50
惣人数 189 人 033			623.80	3.30
合 計		275	751.63	—

集計した数字にαを付した。又、金分は前記入用金から同項以外の項を差引いた数字を便宜上記した。

なお前記の黄金、御太刀、紗綾は東海道音物に含まれるが、表示しなかった。

大里道御音物の項には小倉御用達皿屋七兵衛、塩飽屋又兵衛の名がみえているから、瀬戸内海の渡海船は兩人の用達によるのであろう。

東海道通人馬渡方の内訳は第一〇表の通りである。これは全額尾張屋亀吉に渡されている。彼は通日雇請負人と考えられるが、まだ確認していない。恐らく大坂ではあるまいか。

先ず金二七五兩は東海道請負通馬夫の証文前御定賃銀である。従って請負の証文は通し馬五足、通し日雇二一〇人

で金額は金二五〇両であつたろう。これには但書として「此節御入高惣夫数一八九人三厘三毛」付賃銀御定通相渡也」とある。従つて実際に使用されたのは一八九人三厘三毛であらう。

この証文前御定賃以外の項は、附加分が超過分に当ると考えたい。

銀八匁は伏見奉行に藩の御目付が使者を勤めた際のものである。なお通日雇以外に若党二人、仲間五人が従つてゐる。

銀一二匁五分五厘については、人名は□左衛門の虫損不明分を推測で補つた。一八日とは江戸・大坂間の日数と考える。家中分の賃銀であるが、藩から渡されている。

銀一二匁八分は藩主が江戸に到着して老中廻りをした際のものである。

銀四二匁四分八厘は藩主のものであるが場所は不明である。強いて考れば登城か上使衆かであらう。

銀三五匁については、人名は虫損の為に全く不明であるが、推測して補つた。次の銀一八匁の堀江宗有は医者と推定されるから、幸丸勘助と彼の御添肩四人は藩主に従つた際のものではあるまいか。

銀六二三匁八分は惣人数一八九人三厘三毛（日切一日分一人につき銀三匁三分宛）の分である。内訳を計算すると、二三人九分四厘貳毛と、一〇二七匁八五〇目及び虫損のため不明分一荷（恐らく一〇貫目位）となる。

前者は藩主関係が一〇人、通馬代りが一〇人、小指之者が三人九分四厘二毛で、藩主関係とは御時斗、御棗簞笥、御挾箱、御簞箱、御替茶弁当である。

後者は先ず藩主関係が六一二貫二五〇目と不明一荷で全体の約六割に当る。荷物は少し繁雑であるが記すると、御納戸御長持二棹、御納戸両掛六荷、御腰物方長持一棹、御茶道御用物両掛一荷、御陸持一荷、御幕箱一荷、御酒弁当一荷、御樽弁当一荷、御弁当一荷、御鍋弁当一荷、御陸樽一荷、御膳弁当一荷、御備合羽一荷、御和久立一荷、桐油

竹馬一荷、御手廻合羽四荷、御川印二荷、御厩籠長持一棹、御台所長持一棹、御風呂一棹、御掛札兩掛である。これが藩主関係荷物の何の位の部分に当るかは明らかでない。

つぎに家臣では幸丸勘介が具足、兩掛一荷、合羽籠一荷、竹馬一荷で、大屋十左衛門が兩掛一荷、合羽籠一荷、森新之丞が兩掛二荷、堀江宗有が薬箱一荷、兩掛一荷、合羽籠一荷、篠沢藤市他七人が兩掛各一荷、井手口玄悦他一人が各薬箱である。これらの人名は堀江宗有が医者と推測する他は明らかでないし、これらの人々の荷物の全部に当るかどうかも不明である。

彼等の他に御徒士中が兩掛六荷で、下書役も兩掛で、雨具としては御厩小頭渡、御厩御帳付、御坊主中、小頭、小使足輕、百人者小頭などがみえいる。最後に御草履取桃灯籠一荷が記るされており、虫損のため以上の他に不明分若干がある。

以上は恐らく請負証文によるものと考えられる。

再び第九表に帰えると、京都所司代、町奉行、与力などのための御廻京渡方の項の内では先ず金四兩二分が尾張屋亀吉、上総屋作兵衛の兩人に渡されている。上総屋は文政四年に大坂の上町組に属し南新町三町目にある。この金は御廻京に際して下馬先で他の「渡之者」から難題を申掛けられるのを前もって手を入れておくために、大坂で兩人が願った結果である。京都では江戸の六組同様に大坂の通日雇もたかられている。

次に尾張屋亀吉に銀二四六匁が御廻京の際の通日雇八二人分（一人当り銀三匁宛）として渡されている。先ず藩主関係が三人で、その内訳は御添肩、御挾箱、御簀箱、御納戸兩掛、御酒弁当、御鍋弁当、御膳弁当、御時斗、御陸持、和久立、御草履取桃灯籠、御手廻竹馬、桐油竹馬、御備合羽である。

次に家臣としては幸丸勘助が駕籠・具足箱・兩掛・合羽籠・竹馬、大屋十左衛門が駕籠・兩掛・具足、堀江宗有が

駕籠桑・箱・両掛・合羽籠、不破忠右衛門が駕籠・両掛・合羽籠、杉森六郎兵衛が駕籠・両掛、安本四郎左衛門他四人が両掛、井手口玄悦が桑箱、御徒士が両掛・竹馬、御坊主中と小使足輕などが雨具となっている。その他に荷物に關係なく小指之者四人がいる。

右の内で幸丸勘助、大屋十左衛門の具足が実際には京都廻にならなかったため、各々銀三匁が返納される筈になっている。

以上大変長々と書いたのは通日雇が運搬に従事した物を具体的に考えるためである。

つぎに清水太郎左衛門、篠沢藤市に各銀一五匁が通日雇五人（一人当り銀三匁宛）分として、森喜太郎他八人に各銀三匁が通日雇一人分として渡されている。請負人の記載はないが、尾張屋亀吉の配下の者ではあるまいか。

項が變つて東海道万小払には、上総屋作兵衛に「江戸表出立仕候ニ付於御台所、御酒拝領代りニ百足、御肴進上仕候ニ付百足、看板代りニ百足、例年之通被下之」と金三歩があり、他に虫損により金額不明分が例年の通り目録としてみえている。⁽⁹⁵⁾

従つて通日雇に全体で金二九三兩一分一朱、銀二九匁六分三厘以上の額が渡された筈である。これは道中御用金銀の約六％に當る。

以上によつて考えると、証文名及び實際に賃銀を受取つて道中を実施したのは屋張屋と考えられるが、上総屋が例年通り目録などを受け大坂では尾張屋と共に行動している。尾張屋の下請けか、今回限り尾張屋のみが表面に出ているかは後考にまきたい。

一〇 通日雇の道中殺害事件

天保一四年電集癸卯秋七月朔旦関泰継序、同塩谷世弘後序「丕揚録」⁽⁹⁶⁾卷之五には、寛齡公水野忠任年譜として明和八年の頃に

辛卯八年公卅六歳

九月六日唐津ヲ発駕、十月十五日着城セラル、十二月十二日桜田組御防ヲ命ゼラル、

とある。「駅伝権策」⁽⁹⁷⁾坤に収められている「明和八辛卯年十月 水野和泉守様御参勤之節於御旅中日雇之者切害取扱之一件」は、前記の参府で明和八年九月六日に九州唐津を出発し、同一〇月八日に遠州袋井宿に止宿した水野和泉守に、大坂玉水町尾張屋七兵衛口入で供をした日雇の者、即ち通日雇の内で御道具持手代り角平が御長持日雇六次郎と同長吉を口論の上で切殺し、宿の亭主吉兵衛とその召仕三助を手負せた事件を水野家側で記録編纂したものである。

つまり道中での藩、宿、通日雇請負人、通日雇の關係を、裁判を通して明らかにしている。

尾張屋七兵衛は安永六年「難波丸綱目」によると御大名人足請負方である。

さて事件の發生に際して唐津藩は御物頭関善左衛門、御目付佐藤源藏、歩横目矢嶋半藏、其外に足輕が少々残り、殿様は翌九日朝に袋井宿を出立した。事件の詳細は宿継便で一〇月一三日に江戸屋敷に到着している。

袋井宿の駅は大草太郎左衛門代官所の支配に属しているから検使は代官所が行っている。

藩の江戸屋敷では届出は、検使の手代が代官の江戸留守手代中に懸合った上で届書を出したい意向である事を宿継便で知った。藩側では御届書の案文を代官所側の御便をみた上で申合せてと考え一三日の提出を見合せたが、明後一五日着府のためそれ迄延期する訳にはゆかず、又袋井宿で内済になっていた場合には藩が届書を出せば間違になる。そこで

死人へ日雇仲間之事、宿之者手負之儀内済相済候へ、御供之内ニ而喧嘩之事ニ相成候故、此方様御仕置ニ可相成候得共、日雇之事故何れニモ御届申

公儀之御仕置ニ相成候筋ニ候哉之旨不分候間（下略）

とあるのは、通日雇がいずれの裁判権下に属するか判断し兼ねた事を示している。

藩では江戸の町奉行牧野大隅守の用人に内談した所、疵人であれば内済の可能性もあるが、切殺では不可能である。そして

御道中致御供候而モ、日雇之事ニ候得へ、其者住所も可有之候間、御家来と申々日雇之方重被成候間、御手前仕置置ニ者不相成筋（下略）

と申渡された結果、代官所からの御便がなくても明日届書提出を決定した。この申渡は参勤交代道中の御供をしていても、通日雇は住所があるので家来ではない。飽く迄も日雇として裁判上は処理される事を示している。

そこで一四日に御着後の一件届出では前述の通り藩の手落になるために、届書提出の了解を代官所側に求め、その際に後日提出の代官所の届書と意味違になるのを防ぐために、出来れば口上に止め、要求されたら書付を提出する手筈にした。

この線で道中奉行（勘定奉行、以下単に道中奉行と記す）安藤弾正少弼の用人北村文左衛門に説明すると、代官側を待合して滞った場合には手抜になるとの指摘で、書付提出を要求された。一〇月一四日付水野和泉守家来藤川与左衛門名義で書付を提出する。なお同文言の届書を大御目付（道中奉行）池田筑後守にも提出した。

用人から御用番にも届書を出したか質ねられ、藩備では

久世出雲守様ニ而宝暦八年御領分之百姓御料之者を致切害候節、最初御届は道中御奉行様江斗御家来届ニ而相

濟、右之者御呼出之御用番様江は御届候例ニ而、此度も同様之事故（下略）

と答えて、御用番から呼出があつてから提出する心得と述べた所、近例からして差図する訳ではないがと断りながらも提出を勤められ、更に兼て御懇意であるから御届文言の相談に応ずる旨の申出があり、明朝に提出する事を許された。そして「先格吟味文言案紙認を可申旨ニ而、所々於旅中異変之帳面共被爲見、御届書案文認被爲見」れた。一部に「和泉守差扣相伺候様ニ可相成」と認直しを求め、帰つて文言認直を許るされたが、訂正した文言の写を心得のために道中奉行に提出する事になった。

この他に、事件は日雇宿で起つたのであるから相宿の者がいた筈で、彼等が和泉守同勢に加つて江戸屋敷に到着した場合、日雇の内で相宿及び事件に懸合がある者は日雇世話役と相談して屋敷に留めて置くが、江戸住居の者は町奉行に、遠国の者は道中奉行に届けるべきかについて、用人は「此方へ御届可被成候、譬江戸者ニ而も町奉行へ御届ニは及間敷」と両者共に道中奉行に届ける様に申渡した。

しかしこれだけでは不安になった藤川与左衛門は江戸町奉行の用人塩谷孝左衛門にも質ねている。町奉行では、同宿の日雇を取逃してはよくないので本来は袋井で差留るべきであり、次善策としては屋敷で留るべきだ。江戸者がいた場合には「御問合之通此方へ御届之事ニ候、江戸者ハ被差留候得ハ其所へ訴出候事故、此方へ御届不申候而ハ手拔ニ相成候由」を申渡された。結局江戸者は江戸町奉行に届けるので、勘定奉行の意見とは喰違っている

用人に対して明日、日雇を差留るについて、取計が良くないと騒動が屋敷内で起るかもしれないため、予め日雇世話役の者老人を呼んで申含ませる事について了解をつけている。

結局通し日雇の者共の騒動を差留め吟味すべき旨を御目付牧田幾右衛門に仰付けられ、又日雇指の者の内で頭立った者老人をあらかじめ屋敷内に呼んで置き、対策のため足輕中間を集めておく事になった。

一日には、御用番松平周防守に藤川与左衛門から一〇月九日付水野和泉守名義の書付が提出された。また道中奉行安藤弾正少弼の用人大塚蔭に御用番宛届書の写を渡した。そして別段の問合として、日雇の者の内で関係者がない場合について、世話役からその旨の証文を取って届ければ、日雇、世話役共に屋敷に差留める必要はない旨を聞いている。続いて道中奉行池田筑後守の用人鈴木善右衛門に届書を渡し昨夕の事情を説明した。

一方江戸屋敷では、御目付（道中奉行）の仰付通りに歩横目四人を裏門に配置し、殿様が到着の際には、継人足は勝手次第に差戻し、指の者と日雇は全員門内に入れる事にしたが、方針が一定と云う訳でもなく、日雇指の者に吟味をさせて、指の者から証文を取る方が無難だし、日雇全員を留めては大勢であるから、対策上長持日用の者と角平同宿の者の全員を留る事に変更した。

八ツ時に到着し、予定の通り指の者五人と角平同宿の者、長持の者の全員を屋敷に留め、他の日雇は指の者三人が裏門で人別を改め歩横目に断って差戻す事を指の者に申聞せたが、御目付から殺された六次郎、長吉と同宿の者が屋敷迄長持を運んだか問題にされた。それは「同宿之御長持之者共大方品川ニ而代り合、式人爰元迄御供仕候」と答えた結果、同宿で品川迄来た者を呼寄せ、品川宿で交替した者は差戻された。事件から離れるが通日雇は途中で代り合ったり、参加する可能性があったらう。⁽⁹⁸⁾

御目付（道中奉行）から指の者五人に、内済は不可能で御用番に届書を提出したから、角平同宿の者と長持の者の御尋はまぬがれない。本来袋井宿に差留るべき者が御供をしたのは指の者の不行届であると申渡された。そこで指の者と角平同宿の者は屋敷に差留める。長持の者は指の者が懸り合を吟味して名面を提出する事になった。

つぎに角平同宿と長持の者で江戸住居の者は前述の通り差留について町奉行に届が必要である。この点で角平同宿の者は「尾張屋七兵衛手ニ付候者」で江戸者ではない。御長持の者は一人で内二人は現場に馳付けたが家内に入れ

なかったのを見ていない、残りの者は全然騒動を知らないと申立て、「表向尾張屋受ニ候得共、品川南四丁目備中屋作兵衛下受」の者共のため指の者丈けでは名面の証文作製が困難であり、備中屋を呼寄せするには時刻が遅く、また

御当地住居之者ニは無之由申候得共、備中屋手附之者と申候得ハ御当地同様之事ニ而、留置候事町奉行へ御届も入可申哉、其所ハ作兵衛并其方五人之者共追而御吟味之節御答之仕方ニ可依事

と矢張り通日雇について判断が難かしく、長持の者からの願により屋敷止宿になった。

指の者については、同日付で水野和泉守内矢嶋重蔵、大村彦兵衛、市川勇右衛門に宛て大坂玉水町尾張屋七兵衛代伝蔵手附藤八、吉左衛門、惣吉、伊三郎の名義で、指の者で弥兵衛は江戸の高縄住居の者であるから差留ず下宿仰付を願っている。

願の他に指の者で吉左衛門、惣吉、伊三郎の三人は大坂者で妻子があるため一件落着迄江戸滞留は困るし、彼等は袋井宿に伝蔵を始め世話役が残留により、急抛袋井から指の者同様になった為に本来の世話役ではない。従って御証文に名前を記するのには五人の内藤八、弥兵衛のみにしたい希望が申立てられた。これによると日雇でも指の者は請負人仲間のある都市に住んでいると考えられる。

一六日に指の者弥兵衛が備中屋を同道し、長持の者一人について備中屋が「御当地ニ而ハ作兵衛宿ニ仕居候得共、不殘遠国者」と答へ証文は認直になる。事実名前の上に一人は枚方、一人は安芸がついている。

証文には備中屋は尾張屋の下受のため名前を出さず、指の者五人が印形する。なお備中屋は「六組飛脚屋旧記」^(補3)によると、天明九年には品川南四丁目家主で、江戸上下飛脚屋大芝組に属している。藩では中間頭市川勇右衛門が唐津から立帰り御供の者で江戸長期滞在に問題があり宛名から除く事にした。日雇は大坂玉水町尾張屋七兵衛入口日雇と記されている。

通日雇側の態度も余り判然とせず前述の弥兵衛が高輪住居なら関東郡代伊奈半左衛門に届ける必要があり、再び調査すると、「実ハ御当地住居ニ而は無御座、御当地ニ而ハ京橋弓町尾張屋三郎兵衛方旅宿之由」であり、尾張屋三郎兵衛^(補4)も屋敷に来て認めたので届はやめられた。

同日道中奉行切紙が到来したので、藤川与左衛門が出頭し用人から水野和泉守留守居宛の書付を受取った。内容は代官方から犯人の角平を道中奉行方に引渡し、六次郎、長吉の死骸は仮埋する様に申渡したから、袋井宿に残っている家来は処置の上、残っている日雇と共に引払ってよい。但し家来は尋ねる事もあるため江戸差置を命ぜられている。その際に同宿の日雇七人と御長持日雇で現場である旅籠屋に馳付けた二人の合計九人を差留め、その他に日雇世話役即ち指の者二人も差置いた。

世話役は身元確かかの者として下宿を許るされた。即ち大坂玉水町日雇入口尾張屋七兵衛代伝蔵手附、江戸旅宿京橋弓町尾張屋三郎兵衛方藤八、弥兵衛として下宿仰付、御裁許迄は他国せず御用次第出頭の事である。

一七日には、同日付で右の道中奉行仰付の趣を水野和泉守家来藤川与左衛門名義で町奉行に、水野和泉守名義で御用番に届けている。

二〇日夜に袋井宿に残っていた日雇の柴右衛門が江戸に到着した。彼は「手廻日雇之内頭取候者」であり、犯人の角平と同宿の者である。

二一日には御目付(道中奉行)が指の者に柴右衛門召連れを申渡した。同日付で彼の留置について伝蔵手附藤八、弥平から水野和泉守内矢嶋重蔵、大村彦兵衛宛の一札と、水野和泉守内藤川与左衛門から道中奉行宛の伺書が出された。

二八日に、去る一二日に代官手代に角平を引渡した水野家中の関善左衛門、佐藤源蔵が着府した結果、袋井での一

件の口書がもたられて、詳しい事情が判明した。

それによると、袋井での手続の経過は一〇月八日夜四半時頃に御本陣え御道具持手替の角平が一通りの陳述をしたと来た。事件の有様を聞き彼を差留め、日雇受負伝蔵を呼寄せて彼を預置いた。翌九日に殿様は発駕し兩人は残った。

中泉代官大草太郎左衛門に宿役人が事件を訴え、九日に手代中村左市郎、永井常七が袋井宿に見分のため到着し、旅宿梅屋忠五郎方を吟味場所にした。吟味に際して藩側兩人は吟味の案内を受けただけで立会っていない。

さてその際の多くの注進書付、口上書の内で、本稿に関係のものを以下紹介する。

一〇月八日付中泉御役所宛の袋井宿（名主、問屋、年寄）の注進書によると、同日に宿の吉兵衛が右腕二カ所の手疵、宿働の者一人が左耳の脇一カ所の手疵、日雇仲間二人が切倒されている。

なお手負人日雇宿吉兵衛は二八才、薄手負人日雇宿吉兵衛伯父下男三助は四三才である。一〇月付掛川宿医師戸塚竜伯書付では、吉兵衛は「右之腕肩を疋寸五分程下り、疵口貳寸四分程、深サ一寸程、手首を二寸程上り疵口一寸貳分、深サ一寸程」であり、三助は「左之耳脇疵口三寸貳分程、深サ八分程、耳ニ少々かすり疵」である。吉兵衛は深疵で出血が夥敷く元気がない、陽脛通禁線を切る程のため破傷風牀の余病が出る危険がある。

つぎに一〇月付袋井宿申口によると、水野和泉守役人はその本陣で宿側に対して、事件の下手人は

日雇角平と申者ニ而、御手廻りニ而ハ無之候得共、人をも切倒手疵等為負候者ニ付、最初受負証文如何成凶事等も有之候而も、日雇頭江引受候積りニ付、右角平は日雇頭尾張尾七兵衛代伝蔵へ取逃不申候様急度預置

と伝え、更に「御通りニ付而之日雇喧嘩之儀」であり、「支配」からの検使もあるから役人を残すと申渡している。要するに参府道中の事件ではあるが、通日雇の請負証文を楯にして藩側の立場を宣言した訳である。

これに対して宿側の立場は、一三―五日の吟味に際しての口書では、宿は日雇頭から事件の屈を受けていない点を強調して、

日雇之者仲間喧嘩手負等出来之儀は、折々之儀ニ而御座候得共、日雇方引受宿方へ一向存不申罷在候儀ニ候得共、此度日雇頭と相対仕候得へ、以後例ニも相成、其度々御注進御見分受候而へ、宿方臨時之入用相懸り難儀仕候間、何分和泉守様御役人中へ御懸合之上、御見分被下候様仕度奉存候

と述べている。つまり従来日雇の傷害事件は日雇方のみで処理し宿方は関係しないのが仕来りである。今回の切害事件について日雇頭と相対をすると今後の前例になる。また関係すると注進と見分で宿方の臨時入用がかかる。そこで藩側に見分をさせる事を求めている。結局宿側では立入りたくない。

一方一〇月一四日付宿の一札では日雇頭に預けた角平に、宿方からも昼夜添番二人をつけ、役人も時折見廻る事にしている。なお預先は袋井宿高木屋十兵衛方である。

その角平の一〇月付申口によると、事件は日雇宿吉兵衛方に日雇仲間が寄合い日雇銭の割合について争っているのを鎮めるために入ると、日雇の六次郎、長吉が彼の取扱方がよくないと主張し、結局日雇仲間の大勢と彼の喧嘩になった。その際に脇差を振りかざし、切先が兩人に当たったのは覚えていたが、誰であるかは知らない。皆が表に逃げて一旦脇差を鞘に納めたが、再び六次郎、長吉が来て傷害を起した悪党として彼を打擲し、仲間大勢も火鉢火入を投げつけ、座敷の隅に押詰められ下にしかれた。彼はたまたま手にふれた小刀で兩人を突倒し、又大勢から打擲を受けたが脇差で追払った。これが事件のあらましで、彼は死罪も覚悟している。

次に日雇頭である尾張屋七兵衛代大坂玉水町日雇受負伝蔵は一〇月一四日付申口で、従来往還での日雇受負に際して凶事があれば、引受けて処理する旨の請負証文を提出しているのに、角平を預ってから其筋に届けなかった点につ

いて、「平生私共外御大名様方日雇受負仕、凶事有之候得は引受積りニ而、折々仲間喧嘩有之候得は、夫ハ内証取慎メ候而は是迄は取斗參候得共」と述べ、ついで今回の事件は從來類例のない事で途方に暮れたと不備を認め、ついで宿方問屋名主年寄へ私方ハ不相届、御役所へ直ニ申上候而は筋違差越候と存打捨置、各様ハ直ニ御懸合ニ相成届遅滞仕候段ハ、元ハ私受負日雇仕業之儀ニ候得ハ、宿方ヘセ話懸候儀ニ而ハ無御座候、私引受何方迄ものかれ不申儀と存一向心付不申、大切之御參府通行ニ付日雇御受負平日仕候不似取斗候旨御差当受候而者、如何様被仰付候而も一言之申披無御座候、何分此度之日雇変死ニ付而ハ宿方ヘ懸セ話候筋ニは無御座候間（下略）

として日雇請負人としては、藩に対しては請負証文により、宿に対しては全面的に請負人が処理するのが当然で、藩・宿両者は処理に関係がない事を主張する。これで三者の立場は一致する訳である。

日雇の性格に関連するが、一〇月一六日付で手代から藩の残留者二人に対して日雇宿泊り八人につき「御手廻ニ而も無之、宿割御札内ニも無御座候旨」の確認を求めたのに対する答は「手廻中間ニ而も札内ニ而も無御座候、日雇方受負相対宿御座候」要するに「一統日雇之者」とある。

次に吟味を通して通日雇の出自、性格、服装などをみると、日雇角平は陸奥国餌刺人市生れで両親とは幼少に死別し、伯父の家に養育されたが一二歳で死別した。兄弟がなく一人者になり国元には「親類好身等」全くなく、所々で奉公したが明和六丑年から往還日雇商売に従事するため江戸新橋惣十郎町筑前屋彦兵衛を頼んで人受として日用稼をしてきた。筑前屋は「六組飛脚屋旧記」によると、天明九年には宗十郎町与四郎店で、江戸上下飛脚屋京橋組に属している。日雇受負伝蔵との関係は従来もあった。今回は和泉守御下りの日雇受負を伝蔵がしたので、筑前屋を人受としてその手元に参加した。なお二八才である。

以上の角平申口の日雇受負伝蔵は人受を確認しており、「都而私共日雇差配仕候ニ者慥成受人を以召抱申候」と断

っている。又死亡した日雇六次郎、長吉については、兩人共に品川宿出生の者であり、親兄弟親類の有無は知らない。人が受は六次郎が品川四丁目備中屋作兵衛、長吉が江戸紺屋丁三河屋市助としている。三河屋については確認していない。以上で出自を終る。

所持品を吟味してみると通日雇の服装が具体的に知られる。

角平の脇差一腰は中身無銘で「釧下々壹尺七寸九分程込四寸式分程」で、頭角、縁は赤銅地七子模様菊桐、鮫白、目貫は銅鬚亀、柄糸は古黒糸、切羽は鍔金焼付、鐔鉄は指渡一寸八分地大七子模様菊之葉で、柄袋は黒革で紐付、鞘は黒塗で長二尺七八分、蝶鮫下緒萌黄古糸である。着用品は立横嶋単物一品、藍紋付綿入一品、単帯一筋である。

六次郎の着用品は白紺立嶋単物一品、藍染横筋三尺手拭一筋のみである。

長吉は茶立横嶋単物一品、表浅黄裏茶綿入一品、表立嶋裏萌黄袷一品、藍染横筋三尺手拭一筋の四品である。

死亡した兩人については、日雇頭が死骸を仮埋したが「右鉢日雇之者、殊日雇之内ニ而も右兩人は長持之方日雇ニ候得は、右之外何ニ而も所持之品無御座候」としている。なお袋井宿浄土宗嚴西庵地内に宿の仮埋証文をとり、宿は墓地に御下知のある迄番人をつけている。そして宿に対して日雇頭から故障の際には処理する旨の「札を入れている」。参府に際しての日雇については、吟味をうけた伝蔵は水野和泉守御参府に仰付けられたのは七四人程の日雇であり、この他に六六人程は「御家中方へ相對日雇ニ而私召連日雇」とあり、総勢一四〇人程であるが「時ニ寄候而ハ増減有之儀も御座候」として途中での脱落、参加を示している。

日雇の泊り宿は行列の手当が巧くゆく様に差配の者が割付けけるが、何分日雇の事であるから自分勝手に宿を替える。今度でも吉兵衛宿に差置いた日雇の内で九人は暮に宿に着くと、用事と称して直に掛川宿に赴いている。そこで「右鉢不完成者ニ而何程申付候而も、自分勝手を以宿替仕候儀ニ付、何方ニ誰々差置候と申儀は寔と決候儀無御座

候」とあり、判然としない事がわかる。

最後に袋井宿では証拠物件の小刀が紛失したので角平、伝蔵、日雇宿吉兵衛が吟味をうけたが不明の儘になった。

薄手負人三助は、角平に災難だから申分はない旨の口書を取り、彼の在所室賀兵庫知行所遠州山名郡上方丈村の村役人から手代に宛た身柄渡請書が出されている。

角平は道中奉行の差図により一〇月二日水野和泉守家来兩人から手代に引渡された。

同二二日に袋井宿を出発した藩側の兩人が二八日夕刻江戸の屋敷に到着した。その旨を提出するに際して、角平を日雇頭に預けた点が藩側の手落にならないか評定を重ね、口書は二九日到着として提出した。日雇世話役惣八を伴ってきたので道中奉行用人に質ねた上で他の世話役同様下宿させた。なお伝蔵は口合のため手代に引渡している。

二九日に道中奉行から明一月朔日九半時に角平と同宿した者を差出す様に切紙が到来した。ここで舞台は再び江戸になる。

藩側では日雇を腰縄付で連れて行く事にした所、用人は必要はないが勝手次第との意見である。次に袋井から持参した角平口上書を内々に用人に示し、前記の角平を日雇頭に預けた点を不問になる様に取計いを頼んだ所、用人は水野家役人を御白砂に出さない様にする積りであるが、内容からみて出なくてはならないとして家来兩人同道が求められた。

兩人は在所不案内を理由に御評席に出なくてよい様に取扱を依頼し、結局一人丈け門前迄同道し、事情をみた上で呼出かどうかを決定する事になった。用人は余り気遣をしない様にと申渡している。

日雇の内の江戸者が気になる藩は、日雇の角平と長吉の人受が江戸者であるので、町奉行の内意を得て、様子によつては町奉行にも届ける事の申聞を得た。

また道中奉行用人の差図で、差の者である大坂玉水町日雇入口尾張屋七兵衛代伝蔵手附・江戸旅宿南品川四丁目備中屋作兵衛方惣八は水野和泉守内兩人に一〇月二十九日付下宿についての一札を入れている。

さらに同日付で町奉行に水野和泉守家来藤川与左衛門名義で届書を出した。内容は角平は新橋宗十郎町筑前屋彦兵衛の寄子、長吉は紺屋町三河屋市助の寄子、六次郎は品川四丁目備中屋作兵衛の寄子であるから角平・長吉は御当地者の寄子と云う事である。矢張り道中奉行、町奉行の最初の相違を気にしている。

提出に際して藩が角平に番人をつけず受負人伝蔵に預けた点が問題になるかを質ねた。答は等閑の取計いではあるが、取置いているから問題はないが、道中奉行の心得で決定する事だから道中奉行安藤弾正少弼用人に内談すればよいとあり、藩側はやっと氣遣ない事になった。

十一月朔日に道中奉行所に日雇一〇人は腰縄付ではないが、縄付手配同様に日雇一人に足輕二人中間一人の三人懸りで行く事になった。これは勝手次第と申渡されている事と、公儀御不審の懸っている者だが科人ではないし、差の者から異変の起らない事を受合つて縄付御免を願出たからである。

日雇は門前差置になり、同道した袋井宿残置の役人佐藤源蔵は御広間に通る事を求められたが、御評席に出席しない様に取扱を依頼する口書を出した。それで佐藤源蔵は門前差置になったが、代つて藤川与左衛門が御評席呼出の心得を申渡され、一通り御尋ねわけである旨を含まされて御広間御勝手の方小座敷に罷出た。

ついで御門内に日雇一人に足輕一人附添で入る。さらに代官から差出した日雇角平が御評席に引入られ、続いて日雇一〇人と世話役三人も入る。程なく道中奉行安藤弾正少弼が出座し評定所留役が侍座する。藤川与左衛門は御縁煩着座、その次座に代官手代中村左市郎が着座して吟味が始まる。

藤川与左衛門は吟味手間取りを理由に退座して小座敷に扣を命ぜられる。

吟味が角平、日雇拾人、世話役に及んだ所で三者其儘にして、道中奉行と留役衆が別室で内談し藤川与左衛門を御評席御次に呼出した。吟味手間取のため世話役三人が御当地者であるなら町預にするためである。

藤川与左衛門は世話役三人は下役であり、日雇受負尾張屋七兵衛代としての資格であるから、代官から差出された伝蔵に預ける事を答えて採用されたが、伝蔵について

在所之儀ハ不承候へ共、定而御当地者ニ而ハ有之間敷、左候得共右尾張屋七兵衛へ同家之者尾張屋三郎兵衛と申者御当地ニ罷在候、伝蔵儀御当地ニ罷在候中は定而三郎兵衛方ニ可罷在と奉存候

として、大坂の尾張屋七兵衛と同家の、江戸の尾張屋三郎兵衛方に御預の意見を申上げると、伝蔵に御尋の上で矢張り採用されこれに落着いた。

藤川与左衛門は小座敷に戻り、角平等の吟味が再開し、伝蔵に旅中が聞かれ、それは尾張屋三郎兵衛方であり、同人商売は日雇入口と答えている。

途中であるが通日雇はこの様に恐らく江戸と上方の請負人（日雇入口）は関係があり、日雇の内で主立った者はこの請負人の所に留まり、一般の日雇で江戸の者は人受の寄子である。又遠国の者で江戸にきた日雇は人受・通日雇の備中屋作兵衛に行っている。従ってこの時期でも人宿と六組飛脚屋は類似していると言えよう。そして日雇入口と人受との間、及び通日雇等の間には場合によっては下請関係がある。

再び吟味に帰えって、角平は吟味中入牢、同宿并懸合の者拾人は尾張屋七兵衛代伝蔵と尾張屋三郎兵衛の印形で預け申付になった。世話役三人は藩方から下宿を届け、それにより道中奉行が直接呼出す。従って「今日ニ而御屋敷ハ手切と御心得可成」と藤川与左衛門は申渡されて引取になった。

同日付で角平、日雇拾人の件の仰渡承知の御答を提出した。

翌明和九辰年二月一日に仰渡があり、角平は中追放仰付、其他の一件の者は構なしとなった。六次郎、長吉の死骸引取は道中奉行仰渡で証文を仰付けられ、矢張り同日付御答の使者を遣している。

翌一九日付で御用番松平周防守宛水野和泉守名義の一件御仕置済の御届書を、用人に藤川与左衛門が差出したが、その内に角平が「日雇人足并小揚鉢之者ニ利不尽ニ打擲ニ逢」とあり、この文言は道中奉行の用人がしたため、道中奉行も見て許可を与たので、藩が「差越候通認差出」したにも拘らず、御用番の用人から差扣はと尋ねられ、藩側は差扣は伺っていないとして、

近例御家来ニ而中間鉢之者ニ而も御仕置済御差扣被成候得共、此度之儀誠旅中之日雇之者ニ而、入口方ニ而日々ニも人入替候様成者共故、伺候心得ニ而ハ無之旨、尤先格近例は無御座（下略）

と申開きをし書付は用人に受取られた。ここでも参勤交代での日雇の性格が問題にされており、通日雇は道中でも入替りがある事が知られる。

一件御仕置済の届書は一日付にすべきものが、道中奉行が一九日朝登城の節に御届したから、それに合せる様に差図を受けたためである。

実証はないが、先例のない事件であったから、道中での通日雇の位置付けは、この事件の場合によって以後処理されたのではあるまいか。

一一 結びにかえて

通日雇の仲間が江戸⁽¹⁰⁾、伏見、京、大坂にある事は既に述べた通りだが、性格からみて日雇、日雇入口と人受の関係、通日雇と人宿の類似がある。また飛脚、参勤交代の人足は、五街道に見られる大規模な道路及び中継駅の整備、

維持を可能にした強力な中央政權、即ち幕藩体制によって成立っている。

とすればこの四つの仲間以外にも類似のものが各街道の主要都市にあり、通日雇の四仲間はその内で交通労働者の主要な配分地にあつたと考えられる。

交通労働者である通日雇は同時に都市の日雇でもあつたから、決して四都市に丈けの存在とは考えられない。

岡山の場合には、町手留帳の正徳二年十一月二三日付「人足出し候覚」⁽¹⁰⁾には

一御大名様方御通被成候節は人足大分御用に御座候、此内式拾五人迄は御定之賃錢を取出し申候、其外は相対に出し申候事

一右相対雇賃錢之儀播州辺承合候処前之御定賃錢一倍取申候、御当地も大分只今迄右之通に取来り申候、向後弥右之通に仕其余は堅く取せ申間敷候、但平人は品により右の賃錢之内に而も相対仕取せ可申事

とある。これは往来人足に継人足と日用人足とあり、前者で不足すると後者が雇用された。賃錢は相対であり、播州辺の賃金が参照されている。享保期には道中を上下する岡山の日用人足は六〇〇人計り⁽¹⁰⁾いた。

文化一〇年正月付備前国和気郡三石、片上、藤井、岡山駅の人馬賃増願の口上には、先年よりも大名通行で御雇通し人足が減じて宿継人馬使用が増加した旨を記している。これは一種の慣用句だが、少なくとも通し人足はこの日用人足の事と考えられるから、江戸等の通日雇に類似しているのではあるまいか。

筑前国福岡の場合には、「博多津要録」によると元文五年十一月一二日に嶋井久左衛門、桜田屋伝兵衛は旅日雇の仕組を仰付けられたが、これより先、同二年に願立の際に銀子拝借を願出、その理由として享保一七年の凶作により日雇取が払底しているので、豊後、豊前、中国筋迄行つて日雇の者を連れて来るとしている。なお延享二年には嶋井久左衛門は日雇頭である事実がある⁽¹⁰⁾。この福岡の旅日雇も矢張り通日雇と類似していないだろうか。

いずれにせよ各地についてなお人足、日雇について研究を進めなければ通日雇請負人の性格、位置付けも明らかに
ならないのではあるまいか。

註

- (1) 拙稿「江戸六組飛脚屋仲間について」史料館研究紀要
五号、「同(統稿)」同上六号、「定飛問屋和泉屋『万年
帳』について」歴史四二輯、「江戸六組飛脚屋大津屋と
熊本藩」日本歴史三一五号(予定)。統稿一五〇頁第二
表万延元年で日本橋を一人、合計を一七九人に訂正す
る。

- (2) 慶応義塾図書館所蔵
- (3) 国立国会図書館参考書誌部「諸問屋名前帳 細目四」
(旧幕引継目録6) 四三頁
- (4) 「同右 四」 六一九頁
- (5) 同閲覧部「同右 一」 三八頁
- (6) 「同右 一」 三二〇頁
- (7) 「同右 一」 三五四頁
- (8) 「同右 四」 六四四頁
- (9) 「同右 四」 六二四頁
- (10) 同閲覧部「同右 一」 四三三頁
- (11) 児玉幸多校訂「近世交通史料集」一卷七五二―三頁
「同右」七卷二二一―三頁
- (12) 通日雇について(藤村)

- (13) 早稲田大学図書館、大阪府立図書館蔵本
- (14) 京都大学国史研究室、大阪府立図書館蔵本
- (15) 京都大学附属図書館、大阪府立図書館蔵本
- (16) 神戸大学附属図書館蔵住田文庫蔵本
- (17) 三井文庫蔵本
- (18) 宮内庁書陵部蔵本
- (19) 慶応義塾図書館蔵本
- (20) 日野龍夫『難波九綱目』解題略 大阪府の歴史三三三
三一六頁
- (21) 「大阪市史」第一 五八三頁
- (22) 児玉幸多校訂「前掲書」七二〇―五頁
- (23) 通信博物館蔵本
- (24) 「大阪市史」第四 八三三頁、「達一五八六」、本庄・
黒羽監修「大阪編年史」一六卷三三頁
- (25) 「同右」一五五一頁、「触五四九一」、「大阪市史」第二
六二二頁
- (26) 「大阪市史」第四 二〇九―一二頁「触六〇〇六」、
「大阪市史」第二 一八九頁

- (27) 児玉幸多校訂「前掲書」七二五—六頁
(28) 「大阪市史」第四 一二五—二〇頁「補遺九七四」
(29) 近藤典二「鳥栖地方の宿場」鳥栖市史研究編第一集一四、二九頁
(30) 児玉幸多校訂「前掲書」七二四頁
(31) 「諸問屋名前帳 細目四」四〇頁
(32) 「江戸六組飛脚屋仲間」(通信博物館、三井文庫蔵本)
(33) 昭和三十七年四月大阪の中尾松泉堂書店「畿内を中心とした近世文書及資料目録」(原島陽一氏所蔵) 一頁に、「大坂飛脚飛船問屋『津島屋藤蔵』文書 百四十冊 八百余通」が記載されている。そして「大阪中之嶋筑前屋敷前津島屋飛脚飛船問屋の取引文書 文化〳明治初年に到る大阪飛脚問屋の実体を調る好適の文書」とある。
- この津島屋は嘉永七年「大阪両組通日雇名鑑」の川西組西信町津島屋藤蔵である。「五街道取締書物類寄拾六之帳」(児玉幸多校訂「前掲書」七二五頁)には、文政四年に西信町大坂屋源兵衛借屋津嶋屋藤蔵幼少代判源兵衛とある。
- 内容は次の通である。
- 飛脚仲間組合申合議定書 嘉永 一冊
飛脚便刻付帳 一冊
飛脚御用控 一冊
少将様往還道中船宿請負一件書 十七冊十六通

- 宰相様御上京川船控 十六冊三十六通
京都御弘米淀継下鳥羽揚船賃勘定一件 三冊十九通
御上京運賃控 一冊
御船数控 一冊
有栖川御警衛御人数御宿割 一冊
飛脚御願伝言の覚 一冊
飛脚送状・書状 大坂〳福岡 文政 五十二通
飛脚賃請取状 慶応 百五十通一綴
蒼隼丸御乗船一件 明4 二冊二十通
付乗切手 一枚
京都御用通 六冊
罪人調べ廻文留 明2 一冊
万覚帳他 二十二冊
諸家敷修覆請負仕様帳 四十三冊
諸講規定書 三冊十通
褒状 十九通
御触書写 二冊
大丸店通帳 十冊
- これによると筑前国福岡藩出入の飛脚屋であり、飛脚以外の業務にも従事している可能性もある。私は残念ながら本文書をみる機会を得ていないので詳細は後日にしたい。
- 次に樋畑雪湖「江戸時代の交通文化」五八頁に神田柳

吉所蔵文書として、大坂から但馬湯ヶ島迄の通し駕籠の請負一札を紹介している。河内屋甚七については未確認であり、まだ原文書はみえていない。

一札

一従大阪但馬湯ヶ島迄引戸駕籠一掉、道中六日着、但し賃銀毎日過を以一日一人前に六匁五分宛の定、右六日分二人メ七八匁当地ニ而不残御借被下、髓ニ受取申候、万一道中雨風にて居逗留有之候はゞ、人足一人に限二匁宛御渡し可被下候、若又御勝手にて何れに御廻り被遊候乎、道中日数相掛り候はゞ、右定之日通し限りにて御渡可被下、於尤道中人足不達者仕候はゞ、其所より人足を替、其元様之御差支に相成不申様取計為致可申候、為念之人足請合一札依如件

寛政十二年申七月七日

大阪淀川橋南詰

河内屋甚七

喜四郎

善十郎

山形屋小左衛門殿

(34) 黒羽兵治郎監修「大阪府布令集」一卷七〇頁、「諸仲間新規札ノ交付」

(35) 宮本又次「日本ギルドの解放—明治維新と株仲間—」

〇三頁、大阪府編纂「大阪府誌」第一編商業史二四頁

(36) 児玉校訂「前掲書」七五二頁

通日雇について(藤村)

(37) 伏見町役場(高橋真二)編「御大札記念京都府伏見町誌」四一五頁

(38) 児玉校訂「前掲書」七二—二頁

(39) 「御大札記念京都府伏見町誌」四二—一頁

(40) 「同右」四五—一二頁

(41) 慶応義塾図書館、三井文庫蔵本

(42) 「御大札記念京都府伏見町誌」四六—三頁、「伏見民政誌」一〇七頁

(43) 宮本又次編「大阪の研究—近世大阪の経済史的研究—」二卷一二—四五頁、宮本又次「黒田藩と大阪との関係史料紹介」九州文化史研究所紀要八・九合併号三一—三〇頁

なお同史料中に京都から大坂、江戸への御召料其外を取扱う井筒屋茂右衛門、鴻池店から江戸、京都への御仕送銀の飛脚賃の記事があるが、本稿の対象外であるため省略する。

(44) 児玉校訂「前掲書」七二〇頁

(45) 御状箱沓つ賃銀で、七日八日切が二匁五分である事は六日七日切の賃銀に比較すると差があり過ぎるが後考にまちたい。

(46) 通信博物館所蔵

(47) 児玉校訂「前掲書」七二二頁

(48) 通信博物館所蔵

- (49) 児玉校訂「前掲書」七五二頁
- (50) 堀内芳郎編纂担当「上野原町誌」一二四一頁
- (51) 児玉校訂「前掲書」七二二—二頁
- (52) 早稲田大学図書館蔵本
- (53) 慶応義塾図書館蔵本、なお表紙題簽は「花洛商職ちまたの風聞」である。三井文庫蔵本
- (54) 大東急記念文庫蔵本
- (55) 京都大学附属図書館蔵本
- (56) 京都府立総合資料館蔵本
- なお明治二〇年石田旭山編「京都名所案内図会」(三井文庫蔵本)に「人馬継立業之部」の内に、継立・諸国として三人がある。これが通日雇の業務を継いだものかどうかは不明である。
- (57) 児玉校訂「前掲書」七一八頁
- (58) 「御触留 拾貳番」には、文政四年一〇月付御触(「天保御触書集成」下「五五七九」四六〇頁、「大阪市史」第四「触四五八三」七六八頁)が一月に江戸から到来したとして洛中洛外に触れている。拙稿「江戸六組飛脚屋仲間について」史料館研究紀要五号二四二頁で一月としているのは誤りであるから訂正する。
- (59) 児玉校訂「前掲書」七二九—三二頁、児玉幸多「宿駅」(日本歴史新書)八九—九二頁
- (60) 通信博物館蔵本
- (61) 日本史籍協会本「再夢紀事全」一六五—六頁
- (62) 昭和一〇年五月三〇日に今城書店から購入されたものである。
- (63) 道中での人足統制に関連して、筑後国柳河藩の「天明七年道中供立条目」(樺島壽来編註、城後尚年・半田隆夫校訂「旧柳河藩誌」二二七—八頁)には、一馬かた等不屈之儀有之とも打擲仕間鋪候、勿論荷物御定之貢目より里少もおもく仕間敷事
- 一(略)
- 一供之時自然召仕之下人他方之者と喧嘩、口論仕候ハ、行列不滞様に可致候、其場に其下人之主人、行儀奉行一人相殘可取扱之、以外者行列ミたさず供仕べし、万一侍歟又ハ足輕以下之者右之出入有之ハ其頭並行儀奉行殘候而可取捌之、尤品により用人も可相殘候、都而下々喧嘩・口論仕候ハ、吟味之上主人迄も可為越度候条常々ゆるかせなく可申付之事
- 附、於旅宿自然異変之儀出来候ハ、早々本陣江江可相集事
- とある。人足統制は家中統制の問題でもある。
- (64) 川越に関しては、「法規分類大全」運輸門二八駅通・渡船V二七三—八六頁に、駅通の法が改正された後の明治三年閏一〇月民部省宛静岡藩伺によると、大井、安倍、興津川の「御用物ヨリ農商迄渡船賃可取之則」とし

て、長棒駕籠、切棒駕籠、山垂、宿駕籠、蜻蛉長持、刺長持、分持類としてその人前を記るし、「但通日雇ハ人足分モ可取之、宿人足ハ不取之」と註がある。

これに対する下ケ札には「本文通シ日雇ノ儀ハ素ヨリ旅人ノ儀ニ付今度賃銭表ハ別段書載不致候事」とある。近世の慣習が判断の材料となっていたのではあるまいか。

- (65) 高柳真三・石井良助編「御触書天明集成」(一八〇八) 四七三—四頁

- (66) 「同右」(一八〇九) 四七四頁

- (67) 中国新聞社編「山陽路四十八次」一七七頁によると、曾根松は曾根天満宮の松で、石宝殿は大国主命の出雲の神様が石の宝殿を刻んだとの伝説がある由である。

- (68) 滝本誠一編纂「日本経済大典」二八卷一〇八頁、なお土屋喬雄・大原豊校「近世社会経済叢書」五卷一四七—八頁も参照。

- (69) 本庄栄治郎「日本社会経済史研究」一九一四五頁

- (70) 「御当家令条」卷一(石井良助編「近世法制史料叢書」第二一二頁)、石井良助校訂「徳川禁令考」前集第一六二頁

- (71) 「徳川禁令考」前集第一 六三頁

- (72) 「御当家令条」(前掲書)三頁、「徳川禁令考」前集第一 六三頁

- (73) 「御当家令条」(前掲書)六頁

通日雇について(藤村)

- (74) 「同右」一〇頁、「徳川禁令考」前集第一 六六頁

- (75) 伊東多三郎「幕藩体制」清水弘文堂書房版四—二頁、近世では鳩巢室直清「猷可録」卷之上(「日本経済大典」六卷一五九頁)に説明があり、寛永一九年説は文化六年序石上宜「統卯花園漫録」卷四(「新燕石十種」第三四二七頁)にある。参勤月については湯浅元禎識(天明元年歿)男明善校「文会雜記」卷一下(「日本随筆大成」旧版七卷五八七頁)にある。

- (76) 三田村鳶魚校訂「未刊随筆百種」第十七 一七七一—八頁、なお「同書」一八〇頁、「徳川禁令考」前集第四 三三〇—一頁参照、次に室鳩巢「兼山秘策」第五冊によると政策の決定に彼は存寄申上げを命ぜられ(「日本経済大典」六卷五八五、五八七頁)、実施の結果を「扱諸大名半年の詰の代には役銀出申図に候へ共、少分の儀にて諸大名の勝手には莫大宜敷事共に候由に候」(五九三頁)と記している。

- (77) 「徳川禁令考」前集第四(二四二五)三三一頁、「日本経済大典」六卷七二—一頁

- (78) 「徳川禁令考」前集第四(二四二七)三三三頁

- (79) 「未刊随筆百種」第十七 四三七—八頁

- (80) 「日本経済大典」六卷三三〇頁

- (81) 「続再夢紀事」五一—六頁、なおこれに関係した横井小楠の言動については、山崎正薫編「横井小楠 遺稿編」

九七頁、「再夢紀事」二〇三—八頁、「統再夢紀事」二〇一—頁

- (82) 原伝蔵論文(歴史地理三三卷二号一三三頁)によると慶応元年四月一七日に將軍進発の故を以って四国九州路諸大名の参府を猶予したが、將軍が大坂に至り有耶無耶になったらしいとしている。つぎに渋沢栄一編大久保利謙校訂「昔夢会筆記 徳川慶喜公回想談」(平凡社刊東洋文庫76)によると、明治四二年二月八日(第七)に徳川慶喜は参勤交代廃止について「あれで諸大名の方が強くなっている」(二〇〇頁)と回想し、同年七月一日(第五)には参勤交代復旧について「参勤交代を復古したことは覚えないう。事実から考えて見ていけることとでなし、そういうことはありやうがない」(四六頁)、「あれを緩めた以上は、再び復古するということとはできない。どういふ何か……」(四七頁)と答えている。参考迄に記す。

- (83) 南紀徳川史料刊行会「南紀徳川史」十五冊八七〇—一頁
 なお国立史料館所蔵三井高維収集文書にある弘化二年二月「紀州様御参府ニ付人足請負連印証文」には、
 人足請負連印証文之事

一此度

紀州様御参府被為 遊候ニ付

御当日之御前後人足并御継立、我等中江銀四貫貳百

目ニ而請負申候如実正ニ御座候、然上御通行御荷物相濟候迄は、昼夜不限聊飽略無之様念ヲ入、大切ニ無滯急度継立仕候、尤請負より継立之御用物左之通

一(略)

一(略)

一右御荷物宰領衆、其外足附之人足筋へ内賄之義は、何れ茂私共より賄可仕候

一(以下略)

として請負人物代佐野屋吉蔵、柴屋宇兵衛、紺屋源右衛門、茶屋勘兵衛、高月屋平八、茶屋清兵衛から五町御役人中に宛てている。

請負人、五町役人の性格、場所は不明であるが、宿通過に際して足附之人足、即ち通日雇の内賄を請負っている。詳細は後考にまきたい。

- (84) 「同右」十五冊七二四—五頁

- (85) 「守口市史 史料編」四〇二頁

- (86) 「南紀徳川史」十二冊一六八—一七一頁

- (87) 「同右」十二冊七三—八頁

- (88) 藤野保監修、城後尚年・半田隆夫共編「柳河藩政史料

一」(藩政史料叢書一)一一頁

- (89) 「新訂寛政重修諸家譜」第二 三七二頁

- (90) 「柳河藩政史料」一—三三頁

- (91) 宮本又次編著、藤本篤校訂「国家勘定録」(清文堂史

料叢書第二「卷之三」三九—四〇頁、「卷之八」一七五—八〇頁

(92) 柳河藩御物成役の慶応二年寅正月「丑御物成銀穀中勘目録」(「柳河藩政史料」一七九、八一—二頁)には、

「御参勤御用金三万兩之内」とあるから、金三万兩が入用金であらうか。

(93) 福尾教授退官記念事業会編「近世社会経済史論集」三一—七七頁

(94) 城後尚年・半田隆夫校註「旧柳河藩誌」二三八—九〇頁

(95) 東海道万小松には上総屋佐兵衛として銀 \square 匁七分七厘が「右者東海道貨銀例年之通大坂役所江差出」、また金式分が「大坂表ニ而進上物仕候ニ付御目録、貳百足被下之」とある(八二頁)。上総屋佐兵衛との関係は後考にまきたい。

(96) 北島正元校訂「丕揚録・公德辨・藩秘録」(日本史料選書7)一二四頁

(97) 国立国会図書館所蔵「軼伝書留」七・八

(98) 「佐賀県史」中巻五〇八—一〇頁に紹介されている「水野左近将監様御代記録」によると、水野家唐津藩の文化一〇年から一四年の五カ年平均で参勤交代費用(三四泊)は金三五〇〇兩余である。これは収入の約一五%、支出の約一一%に当る。

通日雇について(藤村)

(99) 黒板勝美「雲助の話」歴史地理一〇巻一号八七—九三頁によると、明治四〇年黒板勝美は箱根に遊び、小田原の人足場、即ち箱根の雲助の遺老である七九歳を頭とする六人許りを調査している。

小田原の人馬の内では箱根迄、人足は三島迄行くのが通例で、「最も中にはそれから先き東海道を通して、五十三次を伏見まで往来した事もあった。現に今日居残って居る古老の一人の如きは、四度まで東海道を往復したということである。一番若い三宅の竹公でも十七八の頃であったか伏見まで行く途中、桑名あたりで喰った蛤のおかげで亀山(伊勢)辺で腹痛を催し、家へ帰るとダダをこねたさうで、今も一つ話となつてからかはれて居る」としている。これは人足が通日雇に途中で採用されたのであらう。

雲助の資格として(一)力の強い事、(二)大きな荷物の荷造りをよくする事、(三)長持歌、換言すれば雲助歌の上手な事をあげている。これは通日雇にとつても同様であらう。

津下剛「雲助・ごまのはひ」経済史研究二二巻一号は昭和九年刊で前記黒板論文を参考書の内にあげているが、小田原宿の人足(雲助)について「中には東海道を伏見まで通すものもあった。これを『通日雇人足』と云ひ、大名の参勤交代の荷物担ぎに雇はれる場合もあつ

た。例者六人持の長持を三、四人で請負ひ、中には江戸から京阪迄も往来したさうである。この通日雇人足の中、一人でも病気になる、途中から新しく雲助を補充し、何等かの事故その他の原因で、長持の運搬が出来ないやうになると、これを『足なし荷物』と称した。又通日雇ではなく、請負の者、或は宰領一人が荷物に附添ひ、他は宿々で雲助を使用する場合もあったが、これも亦『足なし』と称した(五六頁)とある。

(100) 拙稿「江戸六組飛脚屋仲間について(統稿)」で、明治二年の駅通司御用人足を取扱ったが、関係者の内で六組飛脚屋京橋橋組・人宿二番組尾張屋吉蔵、南伝馬町御伝馬人足請負人橋本由次郎、大伝馬町御伝馬人足請負人倉橋武次郎について、明治四年の相対人馬会社との関係は次の通りである。「駅通明鑑」卷六第十篇運輸会社ノ部其二六一―二丁(通信博物館所蔵、なお山本弘文「維新期の街道と輸送」二二九―三三頁に収録されている)によると、明治四年三月七日省議(決判日関)の書類である。最初に「東京持出し相対人馬会社取組候儀ニ付請負人トモヨリ差出候書類入御覧申候」とあり、内容は「相対人馬会社取建規則」と「以書付御披露奉申上候(營業案内)」で、明治四年二月付、南伝馬町三丁目西横町相対人馬屋会社の署名がある。

規則によると社中の人馬持寄連印者は一九人で、人足

二〇〇人持寄九人、小荷駄馬一五疋持寄二人、持寄なし八人である。その内に人足三拾五人、登町十二番地借島田吉蔵とあるのは尾張屋吉蔵と推定される。彼には人足拾五人今井兼吉が同居している。次に人足二拾五人南鍛冶町拾六番地借橋本由次郎、人足拾五人大伝馬町三丁目三拾三番地借倉橋武次郎がみえ、前者には持寄なしの豊田長五郎が同居している。仕事は諸家御荷物、農商売荷を道中出立の際に口駅に持出す事である。

營業案内には「私トモ従来持出人馬渡世仕来候ニ付、同業之者今般一同合併仕、南伝馬町ニヲキテ相対人馬屋会社相建」とある。

六組飛脚屋の一部には持出人馬渡世に従事した者がおり、橋本、倉橋もこれに従事していた事が知られる。

(101) 岡山市役所編「岡山市史」第四 二七三―一五一頁(昭和三年刊)、藤沢晋執筆「岡山市史 産業經濟編」二二六―八頁(昭和四一年刊)

(102) 「岡山市史」第四 二七四―一三頁

(103) 「同右」二七四〇頁

(104) 「同右」二七四八頁

(105) 「福岡県史」二卷下冊四八―一四頁

(補1) 「美和村史」六五八―一六〇頁

(補2) 近藤典二「福岡の日雇人足請負人」福岡地方史談話

会会報一〇号 三九―四一頁

資料

資料として (一)「江戸六組飛脚屋仲間」 嘉永六年、(二)

「同」安政元年、(三)「同」(六組飛脚屋名鑑) 万延元年、
(四)「大阪両組通日雇仲間名鑑」 嘉永七年を採録した。

(一)「江戸六組飛脚屋仲間」 嘉永六年は第三・四図の通りで一枚紙の表面に刷ってある。(二)も様式は同様である、(三)は五段で表三〇行、裏三五行、(四)は五段で表二八行、裏三三行、(五)は五段で表二八行、裏三三行である。(六)の裏の三三行目は一行通して「万延元庚申年閏三月改正 禁売買」とある。

(一)は日本実業史博物館旧蔵国立史料館所蔵、裏面に文久童の印がある。他に写本が通信博物館にあり一八ヵ所に「仲間除」の印がみられる。(二)は通信博物館所蔵、表裏に有沢の印がある。(三)は通信博物館所蔵、三井文庫所蔵、前者には有沢の印と、「万延元年之版 有沢林次郎君寄贈」の符箋がある。

以上を底本にしたが、この外に(六)が大阪府立図書館に

所蔵されている。

(四)「大阪両組通日雇仲間名鑑」 嘉永七年は通信博物館所蔵であり、有沢の印がある。これを底本とした。一枚紙の表面にのみ刷ってある。右端に表題等があり、次に六段九行の表が二つ並んでいる。一段目は他の段にくらべると幅が狭く行がなく通しであり、右の表には上町組、左の表には川西組と記るされている。

なお採録に際しては段数をローマ字で示したから参考にされた。底本所蔵者から複製許可を与えられた事を感謝する。

(一)

江戸

売買禁

六組飛脚屋仲間

嘉永六癸丑年四月改

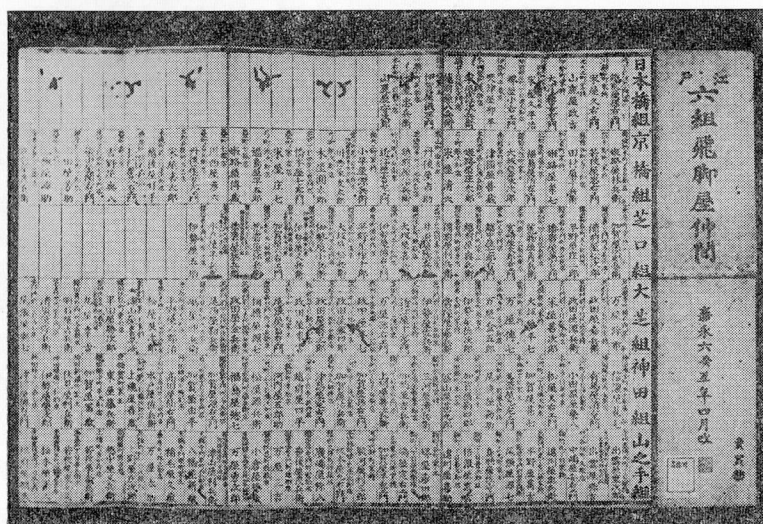
戸

1オ

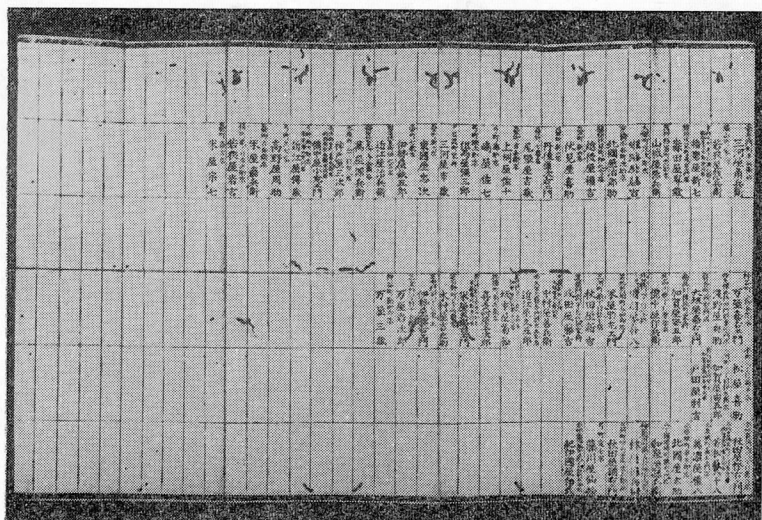
日本橋組

通一丁目俊左エ門店 (朱)年行事

越前屋孫右エ門



第3図 江戸六組飛脚屋仲間（嘉永6年）表



第4図 同上裏

川瀬石町家持

元大工町家持

伊勢町家持

川瀬石町家持

米屋久右エ門方同居

神田紺屋町一丁目源太郎店

伊勢町平蔵店

本両替町茂助店

通一丁目儀左エ門店

通一丁目家主

通日雇について（藤村）

米屋久右エ門

山鹿屋政吉

大津屋喜右エ門

2才

米屋久平治

堺屋小右エ門

大津屋卯平

米屋佐次兵衛

越前屋八兵衛

川瀬石町新助店

本石町一丁目藤八店

京橋組

南佐柄木町喜兵衛店

宗十郎町家持

麻布谷町与三郎店

加賀町家持

北紺屋町藤七店

桜田久保町家主

伊賀屋儀左エ門

米屋忠兵衛

山鹿屋安次郎

（米）年行事

姫路屋林兵衛

若狭屋忠右エ門

田村屋半兵衛

姫路屋孝七

福島屋所左エ門

南紺屋町家持

本材木町五丁目源兵衛店

弓町歙次郎店

滝山町由吉店

芝西応寺町代地政吉店

竹川町利兵衛店

南大工町家持

皆川町式丁目忠右工門店

加賀屋由平方同居

大坂屋栄次郎

津国屋善藏

姫路屋庄太郎

米屋清六

丹後屋市助

越前屋治兵衛

近江屋吉左工門

小平屋源兵衛

川西屋友太郎

弓町歙次郎店

芝口一丁目西側七右工門店

疊町常吉店

弓町歙次郎店

疊町七藏店

疊町七藏店

疊町吉兵衛店

五郎兵衛町与吉店

木挽町式丁目庄次郎店

木屋円太郎

橋本屋七左工門

米屋庄七

福島屋平五郎

姫路屋伝藏

川西屋彦六

丹後屋安左工門

米屋喜太郎

越後屋好平

兼房町伝右エ門店

疊町嘉吉店

芝口一丁目西側七右エ門店

銀座式丁目市三郎店

疊町家持

金春屋敷金兵衛店

甚左エ門町半兵衛店

滝山町家持

本材木町五丁目源兵衛店

姫路屋庄太郎方同居

通日雇について(藤村)

長門屋久右エ門

吉野屋与 八

柴田屋関右エ門

三田屋芳 助

上総屋源 助

筑前屋彦 兵衛

三河屋角 兵衛

若狭屋惣 兵衛

桜田伏見町茂右エ門店

浅草福富町忠助店

大鋸町庄次郎店

京橋水谷町次助店

桜田伏見町伊之吉店

疊町新六店

疊町新六店

疊町七蔵店

疊町吉兵衛店

播磨屋新 七

森田屋専 蔵

山城屋弥 兵衛

姫路屋藤 吉

北国屋治郎 助

越後屋権 吉

伏見屋喜 助

丹後屋次右エ門

尾張屋吉 蔵

弓町藤助店

上州屋佐 十

姫路屋林兵衛方同居

備中屋小左工門

弓町歙次郎店

嶋屋佐 七

弓町歙次郎店

米屋清六方同居

但馬屋弥三郎

近江屋伝 蔵

下目黒町家持

弓町久七店

三河屋市 蔵

高野屋周 助

疊町新六店

疊町吉兵衛店

東国屋忠 次

米屋嘉兵衛

疊町七蔵店

桶町式丁目庄之助店

伊勢屋鉄五郎

若狭屋岩 吉

桜田伏見町伊之吉店

疊町嘉吉店

近江屋治兵衛

米屋宗 七

桜田伏見町与兵衛店

芝口組

万屋源兵衛

木挽町三丁目卯八店

兼房町家持

神戸屋三次郎

加賀屋次郎兵衛

南佐柄木町喜兵衛店

桜田善右工門町与兵衛店

3才

(卷年行事)

桜田和泉町五人組持店

備前屋松次郎

桜田伏見町五人組持店

大坂屋喜兵衛

桜田善右エ門町彦兵衛店

平野屋庄三郎

伊勢屋徳右エ門

浜松町四丁目佐兵衛店

播磨屋万右エ門

平野屋作十郎

芝中門前一丁目新兵衛店

荒物屋角兵衛

大坂屋松兵衛

柴井町久右エ門店

宮崎屋太郎右エ門

伊勢屋小兵衛

桜田善右エ門町家主

越中屋七郎右エ門

伊勢屋又兵衛

桜田善右エ門町鉄藏店

越前屋与兵衛

桜田善右エ門町新兵衛店

若狭屋安三郎方同居

芝口一丁目西側喜平治店

備前屋利兵衛

加賀屋六右エ門

桜田伏見町鉄藏店

井原屋惣兵衛

播磨屋弥兵衛

桜田伏見町五人組持店

播磨屋弥兵衛方同居

播磨屋藤兵衛

曹出町家持

大坂屋平 七

桜田善右工門町宗助店

万屋伝 七

三浦屋又四郎方同居

芝西応寺町善次郎店

水戸屋半兵衛

万屋金五郎

桜田善右工門町常吉店

桜田和泉町桑吉店

伊勢屋五助

伊勢屋徳次郎

麻布本村町家持

常陸屋嘉兵衛

大芝組

芝西応寺町伝右工門店

(※)年行事

芝片門前一丁目松五郎店

万屋弥市

伊勢屋佐兵衛

芝新門前一丁目代地家持

天徳寺門前町家持

政田屋嘉兵衛

近江屋十左工門

芝新門前一丁目代地家持

芝田町六丁目源助店

政田屋源兵衛

万屋孫右工門

芝片門前一丁目庄次郎店

麻布十番馬場町金三郎店

米屋善次郎

政田屋平 七

芝横新町家持

芝永井町代地佐吉店

芝永井町代地卯兵衛店

政田屋銀四郎

芝片門前式丁目家主持

松屋辰次郎

飯倉五丁目勘次郎店

政田屋喜三郎

桜田伏見町勇七店

津山屋喜平次

芝松本町一丁目家主

政田屋東吉

桜田伏見町鉄藏店

平田屋勝次郎

桜田善右エ門町与兵衛店

屋張屋富右エ門

小倉屋勝藏方同居

丸屋幸吉

芝新門前一丁目代地弥兵衛店

相模屋源七

桜田善右エ門町与兵衛店

明石屋吉兵衛

芝新門前一丁目代地弥兵衛店

政田屋金兵衛

芝森元町助右エ門店

清須屋弥兵衛

桜田伏見町伊之吉店

尾西屋勘兵衛

芝片門前一丁目彦七店

尾張屋与七

兼房町伝右エ門店

嶋屋卯兵衛

神谷町三郎兵衛店

万屋嘉右エ門

幸橋外本郷六丁目代地忠兵衛店

平野屋八郎治

西ノ久保普門院門前重左エ門店

浅野屋与助

通日雇について(藤村)

寄合町新右工門店

南品川後地町家持

北品川式丁目要助店

北品川四丁目家持

芝北新網町与四郎店

三河町式丁目佐七店

芝新門前一丁目代地家持

芝横新町家持

大坂屋平七方同居

西ノ久保大養寺門前吉五郎店

大坂屋嘉右工門

加賀屋安五郎

備中屋作兵衛

備前屋喜八

米屋助左工門

秋田屋新吉

政田屋藤吉

中村屋善兵衛

芝片門前一丁目松五郎店

伊勢屋佐兵衛方同居

北横町新兵衛店

芝片門前一丁目庄次郎店

米屋善次郎方同居

芝七軒町与兵衛店

芝中門前一丁目家主

芝金杉一丁目十兵衛店

神谷町勘四郎店

近江屋久五郎

坂本屋菊松

喜多村屋半次郎

米屋五郎右工門

木村屋吉之助

伊勢屋奥右工門

万屋岩次郎

万屋三藏

5才

神田組

神田雉子町辰之助店

(朱)年行事

神田関口町市兵衛店

信濃屋甚 七

有馬屋清右エ門

本郷古庵屋敷金次郎店

三河町三丁目伊兵衛店

小田原屋衆 八

麴町一丁目吉右エ門店

本郷三丁目新平店

松屋又右エ門

本郷四丁目清兵衛店

三河町三丁目伝次郎店

加賀屋甚 七

三河町四丁目儀兵衛店

本郷四丁目家主

美濃屋九左エ門

疊町五人組持店

三河町貳丁目藤次郎店

尾崎屋勘 助

三河町三丁目五人組持店

皆川町貳丁目家主

加賀屋勘四郎

元飯田町幸助店

神田鍋町半六店

富山屋甚 九郎

三河屋清 兵衛

加納屋吉 兵衛

上州屋善次兵衛

加賀屋孫右エ門

加賀屋治 兵衛

津島屋定右エ門

越前屋四 平

河内屋五郎助

通日雇について(藤村)

三河町三丁目伝次郎店

神田久右エ門町藤兵衛店

桜田善右エ門町与兵衛店

皆川町貳丁目忠右エ門店

神田蠟燭町惣助店

小石川下富坂町五人組持店

三河町貳丁目藤次郎店

京橋金六町家主

桜田鍛冶町平次郎店

松屋源兵衛

福島屋惣七

加賀屋源右エ門

加賀屋由平

高田屋仙右エ門

水戸屋佐兵衛

上総屋善蔵

東屋藤兵衛

加賀屋富蔵

6才

5才

神田新銀町家主

神田蠟燭町和助店

神田雉子町嘉七店

本郷三丁目新平店

三河町三丁目伊兵衛店

皆川町貳丁目家主

加賀屋勘四郎方同居

山之手組

赤坂表伝馬町一丁目家持

赤坂表伝馬町一丁目家持

七四

伏見屋利兵衛

伊勢屋栄次郎

津国屋徳右エ門

松屋喜助

加賀屋由五郎

戸田屋利吉

(朱)年行事

出雲屋重次郎

出雲屋重次郎方同居

出雲屋弥 吉

四ッ谷坂町久助店

中嶋屋安右エ門

麴町九丁目家持

遠州屋忠兵衛

芝新門前式丁目代地家持

平野屋万 吉

麴町竜眼寺門前六左エ門店

尾張屋源 七

麴町山元町家主

鳥羽屋佐右エ門

麴町一丁目音次郎店

信濃屋直 吉

麴町一丁目喜三郎店

遠州屋喜 助

麴町谷町家主

堺屋彦四郎

麴町八丁目庄兵衛店

嶋屋定右エ門

小日向東古川町家持

加賀屋平左エ門

浅草六軒町家持

駿河屋利三郎

本所林町四丁目清次郎店

坂本屋九右エ門

桜田久保町林蔵店

広嶋屋弥 八

桜田善右エ門町惣助店

豊後屋茂兵衛

桜田善右エ門町惣助店

万屋三 吉

桜田伏見町鉄蔵店

小倉屋勝 蔵

幸橋御門外本郷六丁目代地五人組持店

万屋勇次郎

桜田善石工門町与兵衛店

相模屋源七方同居

天徳寺門前町六兵衛店

天徳寺門前町家主

兼房町林之助店

尾張町式丁目久蔵店

南紺屋町弥吉店

上楨町吉四郎店

湯島六丁目善兵衛店

赤坂裏伝馬町一丁目兵吉店

津山屋利兵衛

八幡屋新蔵

稲毛屋久蔵

万屋太助

上野屋庄次郎

越中屋又兵衛

若狭屋太郎兵衛

若狭屋重兵衛

67

赤坂裏伝馬町一丁目政右工門店

赤坂裏伝馬町一丁目善作店

赤坂裏伝馬町一丁目善作店

出雲屋伊蔵方同居

元赤坂町龜右工門店

元赤坂町市五郎店

八丁堀岡崎町徳右工門店

神田須田町式丁目代地宇兵衛店

三河町四丁目裏町吉兵衛店

松本屋平六

越前屋調蔵

秋田屋樫右工門

若松屋八十八

美濃屋権八

北国屋太助

和泉屋孫兵衛

林屋徳兵衛

秋田屋猶右工門

弓町定七店

藤川屋仙 松

元大工町家持

山鹿屋政 吉

赤坂表伝馬町式丁目新五郎店

紀伊国屋伊 八

伊勢町家持

大津屋喜右エ門

川瀬石町家持

米屋久右エ門同居

米屋久平治

才江

(二)

売買禁

神田紺屋町一丁目源太郎店

堺屋小右エ門

六組飛脚屋仲間

安政元甲寅年十二月改

伊勢町平蔵店

大津屋卯 平

戸

本両替町茂助店

米屋佐次兵衛

1才

日本橋組

通一丁目儀左エ門店

越前屋八兵衛

通一丁目儀左エ門店

越前屋孫右エ門

通一丁目家主

川瀬石町家持

米屋久右エ門

新右エ門町小三郎店

伊賀屋儀左エ門

通日雇にういて(藤村)

2才

京橋組

本石町一丁目藤八店

南佐柄木町喜兵衛店

宗十郎町家持

麻布谷町与三郎店

加賀町家持

北紺屋町藤七店

桜田久保町家主

弓町鍛次郎店

米 屋忠 兵衛

山鹿屋安 次郎

姫路屋林 兵衛

若狭屋忠右 工門

田村屋半 兵衛

姫路屋長 兵衛

福島屋所左 工門

大坂屋長 次郎

竹川町利兵衛店

疊町七藏店

浅草福留町二丁目七藏店

疊町七藏店

皆川町二丁目忠右 工門店

加賀屋由平方同居

疊町常吉店

兼房町伝右 工門店

元大工町善兵衛店

七八

米 屋清 六

近江屋吉左 工門

姫路屋伝 藏

山城屋弥 兵衛

川西屋彦 六

川西屋友 太郎

米 屋庄 七

長門屋久右 工門

越前屋治 兵衛

弓町鐵次郎店

本材木町五丁目源兵衛店

姫路屋庄太郎方同居

滝山町由吉店

芝口一丁目西側七右エ門店

芝口一丁目西側七右エ門店

弓町藤助店

五郎兵衛町与吉店

下目黒家持

大鋸町庄次郎店

木屋門 太郎

播磨屋新 七

丹後屋市 助

柴田屋関右エ門

橋本屋七左エ門

丹後屋安左エ門

米屋喜太郎

三河屋市 藏

2ウ

木挽町二丁目庄次郎店

金春屋敷金兵衛店

滝山町家持

甚左エ門町半兵衛店

狩野探信屋敷利八店

狩野探信屋敷利八店

弓町藤助店

疊町七蔵店

疊町新六店

姫路屋藤 吉

越後屋好 平

筑前屋彦 兵衛

若狭屋惣 兵衛

三河屋角 兵衛

伏見屋喜 助

丹波屋治右エ門

島屋佐 七

尾張屋吉 藏

弓町鐵次郎店

米屋清六方同居

北紺屋町清藏店

疊町七藏店

桜田伏見町伊之吉店

疊町吉兵衛店

桜田伏見町与兵衛店

南佐柄木町喜兵衛店

姫路屋林兵衛同居

弓町鐵次郎店

東国屋忠次郎

但馬屋弥三郎

北国屋次郎助

伊勢屋鉄五郎

近江屋次兵衛

上州屋佐十郎

万屋源兵衛

備中屋小左門

米屋清六方同居

疊町吉兵衛店

桶町二丁目庄之助店

疊町嘉吉店

北紺屋町藤七店

所左門方同居

疊町七藏店

疊町七藏店

姫路屋伝藏方同居

木挽町三丁目三右門店

近江屋伝藏

米屋嘉兵衛

若狭屋岩吉

米屋宗七

福島屋政次郎

尾張屋金五郎

和泉屋市兵衛

神戸屋力之助

南紺屋町家持

善蔵方同居

本材木町五丁目源兵衛店

加賀町家持

姫路屋長兵衛方同居

桜田伏見町茂右エ門店

芝口組

兼房町家持

桜田善右エ門町与兵衛店

桜田和泉町五人組持店

通日雇について（藤村）

津国屋芳九郎

姫路屋庄太郎

三田屋長七

森田屋専蔵

加賀屋次郎兵衛

備前屋松次郎

平野屋庄三郎

柴井町久左エ門店

桜田伏見町鉄造店

桜田伏見町鉄造店

桜田伏見町弥兵衛店

兼房町家主

桜田伏見町茂右エ門店

桜田伏見町弥兵衛店

桜田善右エ門町宗助店

三浦又四郎方同居

桜田善右エ門町常吉店

越中屋七郎右エ門

備前屋利兵衛

大坂屋喜兵衛

伊勢屋徳右エ門

平野屋作十郎

伊勢屋小兵衛

播磨屋弥兵衛

水戸屋半兵衛

伊勢屋五助

桜田善右工門町新兵衛店

保三郎方同居加賀屋六右工門後見

若狭屋保三郎

桜田伏見町鉄造店

大坂屋松兵衛方同居

大坂屋安五郎

芝中門前一丁目新兵衛店

太郎左工門方同居

宮崎屋太郎治

桜田善右工門町家主

越前屋重五郎

兼房町伝右工門店

加賀屋定五郎

桜田伏見町伊之吉店

大坂屋忠兵衛

桜田伏見町茂右工門店

備中屋幸吉

桜田善右工門町惣助店

三浦屋又四郎

桜田伏見町茂右工門店

伊勢屋又兵衛

桜田善右工門町庄吉店

播磨屋万右工門

大芝組

芝西応寺町五人組持店

万屋弥市

芝新門前一丁目代地家持

政田屋嘉兵衛

芝新門前一丁目代地家持

政田屋源兵衛

芝新門前一丁目代地甚兵衛店

米屋善次郎

芝横新町家持

大坂屋平七

4才

葺手町家持

芝西応寺町善次郎店

麻布十番馬場町金三郎店

桜田善右エ門町与兵衛店

芝片門前一丁目松五郎店

桜田和泉町久米吉店

麻布本村町家持

芝新門前一丁目代地家持

芝松本町一丁目家主

万屋伝 七

万屋金五郎

政田屋平 七

相模屋源 七

伊勢屋佐兵衛

伊勢屋徳次郎

常陸屋嘉兵衛

政田屋藤 吉

尾張屋富士右エ門

芝新門前一丁目代地弥兵衛店

芝新門前一丁目代地弥兵衛店

兼房町伝右エ門店

幸橋御門外本郷六丁目代地忠兵衛店

芝片門前二丁目家持

桜田伏見町弥兵衛店

桜田善右エ門町与兵衛店

芝森本町助右エ門店

芝中門前一丁目彦七店

政田屋金兵衛

尾西屋勘兵衛

平野屋長次郎

松屋辰次郎

津山屋喜平治

平田屋勝次郎

明石屋吉兵衛

清須屋弥兵衛

尾張屋与 七

神谷町三郎兵衛店

万 屋嘉右工門

桜田伏見町鉄蔵店
小倉屋勝蔵方同居

西久保普門院門前重左工門店

浅野屋与 助

芝横新町家持

丸 屋幸 吉

寄合町新右工門店

大坂屋嘉右工門

大坂屋平七方同居

中村屋善 兵衛

南品川後地町家持

加賀屋安 五郎

北楨町新兵衛店

喜多村屋半之助

南品川二丁目要助店

備中屋作 兵衛

西久保大養寺門前吉五郎店

近江屋久 五郎

南品川四丁目家持

備前屋喜 八

芝片門前一丁目松五郎店

伊勢屋佐兵衛方同居

三河町二丁目佐七店

秋田屋新 吉

芝新門前一丁目代地甚兵衛店

坂本屋菊 松

芝七軒町与兵衛店

米屋善次郎方同居

木村屋吉 之助

米屋五郎右工門

桜田伏見町伊之吉店

芝中門前一丁目家主

島 屋卯 兵衛

伊勢屋奥右工門

芝金杉一丁目重兵衛店

神谷町勘四郎店

芝新網町与四郎店

麻布善福寺門前元町勘蔵店

神田組

三河町四丁目長吉店

神田関口町市兵衛店

本郷三丁目新平店

三河町三丁目伝次郎店

通日雇について (藤村)

万屋岩次郎

万屋三蔵

遠州屋助左エ門

竹屋改助

信濃屋甚七

有馬屋清右エ門

松屋又右エ門

加賀屋甚七

本郷四丁目家主

三河町二丁目藤次郎店

皆川町二丁目家主

神田鍋町半六店

関口水道町家持

本郷古庵屋敷金次郎店

麴町一丁目吉右エ門店

本郷四丁目清兵衛店

三河町四丁目清五郎店

美濃屋九左エ門

尾崎屋勘助

加賀屋勘四郎

富山屋甚九郎

三河屋清兵衛

加納屋吉兵衛

上州屋善次兵衛

加賀屋孫右エ門

加賀屋治兵衛

三河町三丁目五人組持店

元飯田町幸助店

三河町三丁目伝次郎店

神田久右エ門町藤兵衛店

桜田善右エ門町与兵衛店

皆川町二丁目忠右エ門店

神田蠟燭町惣助店

小石川下富坂町五人組持店

三河町二丁目藤次郎店

越前屋四 平

河内屋五郎助

松屋源兵衛

福島屋惣 七

加賀屋源右エ門

加賀屋由 平

高田屋仙右エ門

水戸屋佐兵衛

上総屋善 蔵

5ウ

桜田鍛冶町平次郎店

神田新銀町家主

馬喰町二丁目定七店

雉子町嘉七店

津国屋徳右エ門方同居

本郷三丁目新平店

三河町三丁目伊兵衛店

京橋金六町家主

三河町三丁目伊兵衛店

皆川町二丁目家主

加賀屋富 蔵

伏見屋利兵衛

伊勢屋栄次郎

津国屋善右エ門

松屋喜 助

加賀屋由五郎

東屋藤兵衛

小田原屋久米八

加賀屋勘四郎方同居

鳥羽屋佐右エ門方同居

戸田屋利 吉

鳥羽屋徳 八

山之手組

麴町一丁目喜三郎店

遠州屋喜 助

赤坂表伝馬町一丁目家持

麴町八丁目庄兵衛店

出雲屋重次郎

島 屋定右エ門

赤坂表伝馬町一丁目家持

小日向東古川町家持

出雲屋重次郎方同居

加賀屋平左エ門

出雲屋弥 吉

本所林町四丁目清次郎店

四谷坂町久助店

坂本屋九右エ門

中島屋安右エ門

桜田久保町林蔵店

麴町九丁目家持

広島屋弥 八

遠州屋忠兵衛

桜田善右エ門町宗助店

芝新門前二丁目家持

豊後屋茂兵衛

平野屋万 吉

桜田善右エ門町宗助店

麴町竜眼寺門前六左エ門店

万 屋三 吉

尾張屋源 七

桜田伏見町鉄蔵店

麴町山元町家主

小倉屋勝 蔵

通日雇について(藤村)

幸橋御門外本郷六丁目代地五人組持店

美濃屋権

八

万 屋勇次郎

元赤坂町市五郎店

天徳寺門前町家主

北国屋太

助

稲毛屋久蔵方同居

神田須田町二丁目代地宇兵衛店

稲毛屋慶次郎

林 屋徳兵衛

上槇町吉四郎店

三河町二丁目文八店

若狭屋太郎兵衛

秋田屋猶右門

兼房町林之助店

弓町定七店

万 屋太 助

藤川屋仙

松

6才

南紺屋町弥吉店

赤坂表伝馬町二丁目新五郎店

越中屋又兵衛

紀伊国屋伊

八

赤坂裏伝馬町一丁目兵吉店

元赤坂町代地家主

松本屋平 六

三河屋金兵衛

赤坂裏伝馬町一丁目政右門店

越前屋調 蔵

赤坂裏伝馬町一丁目善作店

秋田屋樫右門

才江

元赤坂町増太郎店

(三)

戸

六組飛脚屋仲間

1才

日本橋組

通二丁目儀左エ門地借

(兼)年行事

越前屋孫右エ門

川瀬石町家持

米 屋久右エ門

元大工町家持

山鹿屋政 吉

伊勢町家持

大津屋喜右エ門

川瀬石町家持

米 屋久右エ門方同居

米 屋久平治

神田鍋町東横丁与兵衛地借

通日雇について(藤村)

2才

伊勢町平蔵地借

堺 屋小右エ門

本兩替町茂助地借

大津屋卯 平

西川岸町吉兵衛地借

米 屋佐次兵衛

新右エ門町作太郎地借

越前屋八兵衛

元大工町三蔵地借

米 屋忠兵衛

京橋組

山鹿屋安次郎

本材木町五丁目源兵衛地借

(兼)年行事

姫路屋庄 太郎

宗十郎町家持

若狭屋忠右エ門

加賀町権七地借

桜田久保町家主

姫路屋長 兵衛

銀座一丁目利三郎地借

米屋庄 七

北紺屋町藤七地借

大坂屋長次郎

南伝馬町一丁目重兵衛地借

米子屋仁三郎方同居

福島屋所左門

越前屋治兵衛

喜左門町久四郎地借

弓町歟次郎地借

田村屋半兵衛

米屋清六方同居

弓町歟次郎地借

木屋千太郎

銀座二丁目和兵衛地借

米屋清 六

本材木町五丁目源兵衛地借

姫路屋伝蔵

姫路屋庄太郎同居

播磨屋新 七

浅草福富町二丁目七藏地借

芝口一丁目西側七右門地借

山城屋弥兵衛

柴田屋関右門

銀座二丁目和兵衛店

同町同居

川西屋彦 六

橋本屋七左門

皆川町二丁目保兵衛地借

松村町藤助地借

加賀屋由平方同居

川西屋友太郎

五郎兵衛町吉太郎地借

丹後屋安左門

下目黒町家持

南紺屋町家持

疊町新六地借

木挽町二丁目庄次郎地借

加賀町榮藏店

甚左エ門町半兵衛地借

弓町藤助店

松村町藤助地借

兼房町小兵衛地借

通日雇について(藤村)

米屋喜太郎

三河屋市藏

津国屋善藏

姫路屋藤吉

越後屋好平

筑前屋彦兵衛

三河屋角兵衛

島屋佐七

但馬屋弥三郎

疊町新六店

疊町七藏地借

元数寄屋町一丁目芳次郎店

新肴町孫三郎店

桜田伏見町伊之吉店

同町鎮藏地借

疊町新六地借

姫路屋藤吉方同居

松村町利兵衛地借

長門屋久右エ門

丹波屋治右エ門

尾張屋吉藏

北国屋次郎助

伊勢屋鎮五郎

近江屋次兵衛

小倉屋源兵衛

備中屋小左エ門

米屋宗七

北紺屋町藤七地借

福島屋所左工門方同居

疊町七蔵店

銀座二丁目和兵衛地借

姫路屋伝蔵方同居

桜田久保町武助店

疊町新六地借

桜田伏見町茂右工門店

桜田鍛冶町平次郎地借

翁屋清十郎方同居

弓町茂助地借

福島屋政次郎

尾張屋金五郎

和泉屋市兵衛

丹後屋市助

伏見屋喜助

森田屋専蔵

姫路屋増三郎

芝青松寺門前幸吉店

芝口北紺屋町松兵衛店

疊町嘉吉店

芝浜松町一丁目家主

銀座二丁目和兵衛店

同町同居

同町同居

疊町壯吉店

疊町清七店

米屋政吉

姫路屋富蔵

大坂屋伊兵衛

加賀屋卯之助

中西屋弥助

米屋与兵衛

筆屋喜三郎

田中屋徳兵衛

津島屋平吉

疊町壯吉店

島屋増五郎

兼房町家主

伊勢屋徳右エ門

新看町金次郎地借

姫路屋鶴吉

桜田伏見町茂右エ門店

平野屋作十郎

芝口組

丹波屋銀蔵

芝口三町目兵蔵店

伊勢屋小兵衛

桜田和泉町茂兵衛地借

(朱)年行事

平野屋庄三郎

桜田善右エ門町宗助店

三浦屋又四郎同居

播磨屋弥兵衛

兼房町家持

加賀屋次郎兵衛

桜田善右エ門町与兵衛店

水戸屋半兵衛

桜田善右エ門町与兵衛店

備前屋松次郎

桜田善右エ門町久次郎地借

伊勢屋五助

桜田久保町啓助店

越中屋七郎右エ門

保三郎方同居加賀屋六右エ門後見

若狭屋保三郎

桜田伏見町鎮蔵地借

大坂屋喜兵衛

桜田伏見町鎮蔵地借

大坂屋松兵衛方同居

桜田和泉町政右エ門店

大坂屋安五郎

通日雇について(藤村)

桜田善右二門町家主与兵衛方同居

桜田善右二門町与兵衛店

越前屋寛 蔵

(朱)年行事

相模屋源 七

桜田善右二門町与兵衛店

芝西心寺町五人組持店

越前屋忠 兵衛

万 屋弥 市

桜田伏見町茂右二門店

芝新門前一丁目代地家持

備中屋幸 吉

政田屋嘉 兵衛

同町同店

芝新門前一丁目代地家持

播磨屋万右二門

政田屋源 兵衛

桜田伏見町鎮藏地借

芝新門前一丁目代地甚兵衛地借

備前屋利 兵衛

米 屋善 次郎

桜田伏見町茂右二門店

芝田町三丁目忠兵衛店

伊勢屋又 兵衛

大坂屋平 七

桜田備前町弥助店

葺手町家持

平野屋三 八

万 屋伝 七

桜田善右二門町常吉店

麻布十番馬場町金三郎地借

藤 屋忠 助

政田屋平 七

大芝組

桜田和泉町吉藏地借

伊勢屋徳 次郎

芝新門前一丁目地家持

政田屋藤吉

芝中門前一丁目彦七店

尾張屋与七

芝片門前一丁目松五郎地借

伊勢屋佐兵衛

西久保普門院門前十左工門店

浅野屋与助

芝西応寺町多吉店

万屋金五郎

桜田備前町清右工門店

大坂屋嘉右工門

芝新門前一丁目地弥兵衛店

政田屋金兵衛

南品川後地町家持

加賀屋安五郎

同町同店

尾西屋勘兵衛

南品川二丁目要助店

備中屋作兵衛

兼房町小兵衛地借

平野屋長次郎

柳町家持

喜多村屋半之助

幸橋外本郷六丁目地忠兵衛地借

松屋辰次郎

桜田伏見町伊之吉店

島屋卯兵衛

芝中門前一丁目新助店

津山屋喜平治

芝七軒町庄兵衛地借

木村屋吉之助

山王町庄七地借

明石屋吉兵衛

西久保大養寺門前吉五郎地借

近江屋久五郎

芝金杉一丁目重兵衛店

万 屋岩次郎

芝片門前一丁目松五郎地借

伊勢屋佐兵衛方同居

坂本屋菊 松

芝金杉通二丁目

家主吉平方同居

尾張屋富士右工門

神谷町勘四郎地借

万 屋三 藏

芝新網町与四郎店

遠州屋助左工門

南品川一船社地門前十次郎店

加賀屋孫 藏

西久保同朋町長七店

福島屋嘉兵衛

芝中門前一丁目奥右工門店

大坂屋忠 七

5才

芝田町三丁目忠兵衛店

九六

大坂屋平七方同居

中村屋善兵衛

同町同店大坂屋平七方同居

米屋五郎右工門

神田組

三河町三丁目家主

(参)年行事

津国屋徳右工門

神田関口町家持

有馬屋清右工門

本郷三丁目新平地借

松 屋又右工門

本郷四丁目家主

美濃屋九左工門

麴町一丁目吉右工門地借

上州屋善次兵衛

神田久右工門町一丁目蔵地

藤兵エ地借

福島屋惣 七

雉子町孫三郎地借

信濃屋甚 七

関口水道町家主

馬喰町二丁目定七地借

伊勢屋栄次郎

皆川町二丁目五人組持地借

三河屋清兵衛

神田佐久間町四丁目代地
常次郎地借

本郷三丁目新平地借

加賀屋勘四郎

桜田鍛冶町忠兵衛店

富山屋甚九郎

三河町三丁目伊兵衛地借

松屋喜助

柳町家主

加賀屋長藏

三河町三丁目伝次郎地借

小田原屋衆八

三河町二丁目鎮五郎地借

東屋藤兵衛

三河町二丁目鎮五郎店

加賀屋甚七

皆川町二丁目五人組持地借

上総屋善藏

皆川町二丁目保兵衛地借

高田屋仙右エ門

加賀屋勘四郎方同居

戸田屋利吉

小石川富坂町源兵衛地借

加賀屋由平

三河町三丁目岩次郎地借

越前屋四平

本郷春木町二丁目家主

越中屋久次郎

麴町九丁目平次郎地借

出雲屋重次郎

三河町三丁目啓次郎地借

池田屋吉五郎

芝新門前二丁目代地家持

遠州屋忠兵衛

三河町四丁目徳太郎店

山形屋徳兵衛

金春屋鋪源七地借

平野屋万吉

四ッ谷坂町佐平次店

石川屋清吉

麴町一丁目金兵衛店

尾張屋源七

三河町三丁目徳右エ門店

仁田屋金太夫

麴町谷町家主

遠州屋喜助

同町同店

紙屋太助

鳥羽屋佐右エ門方同居

鳥羽屋徳八

山之手組

麴町九丁目勝三郎店

島屋定右エ門

幸橋御門外本郷六丁目代地

本所林町四丁目善兵衛地借

彦右エ門地借

(参年行事

万屋三左エ門

桜田久保町林蔵地借

坂本屋九右エ門

赤坂表伝馬町一丁目家持

広島屋弥八

桜田伏見町鑲藏地借

天徳寺門前町家主

新肴町孫三郎地借

市五郎方同居

赤坂裏伝馬町一丁目家主

元赤坂町平兵衛店

南佐柄木町清助店

四谷坂町久助地借

桜田善右エ門町宗助店

上根町吉四郎店

小倉屋勝蔵

稻毛屋久蔵

万屋太助

松本屋平六

美濃屋権八

藤川屋仙松

中島屋安右エ門

豊後屋茂兵衛

南紺屋町兵藏店

須田町二丁目代地太兵衛店

元赤坂町家主

元赤坂町代地家主

麴町六丁目伝兵衛地借

七兵衛方同居

神谷町万蔵店

赤坂裏伝馬町一丁目甚五郎店

赤坂一ツ木町家持

若狭屋太郎兵衛

越中屋又兵衛

林屋徳兵衛

三河屋金兵衛

万屋忠兵衛

石川屋又次郎

万屋三吉

北国屋太助

扇屋文助

ウ 万延元庚申年閏三月改正

禁売買

(四)

大阪両組通日雇仲間名鑑

嘉永七甲寅年改
売買禁

右1

上町組

右2

松尾町

(朱)年行司

政田屋権次郎

同町

(朱)年行司

近江屋伊兵衛

北新町一丁目

(朱)年行司

丹波屋平兵衛

常盤町一丁目

加賀屋吉左エ門

右3

鎗屋町

徳井町

上本町二丁目

内本町上三丁目

嶋町一丁目

南新町一丁目

徳井町

同町

同町

上総屋作兵衛

甲州屋勘兵衛

加賀屋専之助

綿屋市郎兵衛

豊嶋屋栄助

加賀屋新次郎

大和屋善次郎

江戸屋藤八

信濃屋徳左エ門

右4

南革屋町

農人橋一丁目

内本町上三丁

白子裏町

谷町二丁目

内本町太郎左エ門町

折屋町

南新町一丁目

錦町一丁目

越後屋太郎兵衛

出雲屋七 蔵

丹波屋勘 吉

美濃屋久 七

河内屋政右エ門

越中屋甚 助

三河屋新 助

河内屋金 兵衛

丹波屋元 吉

右5

鉤鐘上之町

折屋町

丹波屋勝次郎同家

中道村

谷町二丁目

今宮村

内淡路町三丁目

常安裏町

炭屋町

江戸屋吉 蔵

姫路屋又右エ門

近江屋惣 吉

上総屋亀久右エ門

浜田屋安 兵衛

広嶋屋嘉 七

播磨屋新 七

播磨屋喜右エ門

川西組

左1

堂嶋新地中二丁目

(朱)年行司

左3

常安裏町

土佐堀二丁目

石井屋長兵衛

万屋権次郎

西信町

津嶋屋藤蔵

同町

豊後屋伊右三門

江戸堀二丁目

(朱)年行司

同町

山城屋半兵衛

筑後屋又次郎

常安裏町

同町

炭屋又七

万屋利助

同町

同町

万屋喜平次

万屋松兵衛

同町

同町

山田屋半兵衛

堺屋定右三門

同町

同町

加賀屋善八

播磨屋孫八

江戸堀四丁目

同町

山家屋長兵衛

播磨屋仙吉

左4

梶木町

櫛屋町

江戸堀五丁目

木津屋三吉同家

宗是町

天満樋上町

堂島新地一丁目

高麗橋二丁目

道空町

常安町

通日雇について(藤村)

絆 屋忠次郎

久代屋卯 助

万 屋与之助

三田屋弥 助

今宮屋糸之助

相模屋与三郎

大阪屋忠右エ門

池田屋吉兵衛

左5

常安裏町

備中屋岩蔵同家

常安裏町

同町

同町

常安裏町

同町

堂嶋新地中三丁目

立売堀中橋町

播磨屋金 蔵

河内屋平兵衛

備中屋岩 蔵

西田屋次左エ門

播磨屋政 吉

播磨屋源 助

備中屋藤 蔵

難波屋佐兵衛

豊嶋屋源右エ門

上福島村

万屋甚吉

(補3) 児玉幸多校訂「近世交通史料集」七卷一一一頁

(補4) 「同右」一一三頁に尾張屋三郎兵衛が京橋組であるが、

「南から町久右衛門店」である。

(補5) 「同右」一一三頁

後記 国立史料館、国立国会図書館、通信博物館、宮内庁書陵

部、京都府立総合資料館、大阪府立図書館、京都大学附属

図書館、神戸大学附属図書館、慶応義塾図書館、早稲田大

学図書館、大阪経済大学日本経済史研究所、三井文庫、原

島陽一氏は所蔵史料、図書の利用を許可された。黒羽兵治

郎、新保博、河内八郎、甲斐英男、富田正弘、橋本輝夫、

肥田皓三、田中康雄、笹本光代、野村君代、森中和子の諸

氏の御世話になった。記して感謝したい。

なお本稿は昭和四八年度文部省科学研究費補助金一般研

究による成果の一部である。

